

杵築市

つね みち はる だ
恒道原田遺跡

— 県道山香院内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2021

大分県立埋蔵文化財センター

つね みち はる だ

恒道原田遺跡

— 県道山香院内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

序 文

本書は、県道山香院内線道路改良事業に伴い、大分県土木建築部別府土木事務所の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した、恒道原田遺跡の発掘調査報告書です。

調査を行った恒道原田遺跡は杵築市山香町中心部の東に位置し、北には山香町のランドマークともいえる甲尾山、南西には縄文時代後期の貯蔵穴群が発掘された龍頭遺跡などの遺跡や文化財が残されています。

恒道原田遺跡の発掘調査では、弥生時代後期の土坑や古代の掘立柱建物、中世の土坑等の遺構や、後期旧石器時代から近世にかけての遺物が確認されました。このことから、旧石器時代以降、断続的にこの地が生活の場として利用されていたことが分かりましたが、残念ながら小規模な発掘調査のため遺跡の全体像までは明らかにできませんでした。しかし、地域の歴史解明のためにはこうした地道な調査成果の積み重ねが不可欠であると考えます。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和3年3月31日

大分県立埋蔵文化財センター

所長 松 本 昌 浩

例 言

1. 本書は令和元年度に実施した、大分県杵築市山香町大字野原に所在する恒道原田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県道山香院内線道路改良事業に伴い、大分県土木建築部別府土木事務所の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。
3. 恒道原田遺跡の発掘調査は令和2年1月20日～2月25日にかけて実施し、大分県立埋蔵文化財センター調査第一課 主査 横澤 慈、同課主任 土谷崇夫が担当した。
4. 発掘調査の実施にあたり、発掘作業及び記録作成、現場管理等を支援業務として民間調査組織に委託した。発掘調査における実測図の作成及び写真撮影は上記調査員の指示のもと下記の支援業務受託者が行った。
・株式会社島田組大分営業所（調査技師 平嶋文博・調査助手 藤 謙太郎）
5. 出土品の洗浄、注記、接合、実測、写真撮影、トレース等の整理作業は令和2年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。遺構・遺物図版の作成は横澤が行った。
6. 出土遺物及び調査記録は大分県立埋蔵文化財センター（大分市牧緑町1番61号）で保管している。
7. 本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。
8. 本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SB（掘立柱建物）、SA（柵列）、SK（土坑）、SD（溝）、SP（柱穴）、SX（性格不明遺構）
9. 各遺構の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』（1997年度版）を参照した。
10. 本書の執筆・編集は横澤が行った。

目 次

序文

例言

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節	調査に至る経過	1
第2節	発掘調査の経過	1
第3節	整理作業・報告書作成の経過	1
第4節	調査組織の構成	2

第2章 遺跡の位置と環境

第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	3

第3章 発掘調査の成果

第1節	試掘調査の概要	5
第2節	本発掘調査の概要	6
第3節	調査区の土層	8
第4節	遺構と遺物	10

第4章 総括

第1節	恒道原田遺跡の年代的位置づけ	34
第2節	恒道原田遺跡周辺の遺跡動態	34

挿 図 目 次

第1図	恒道原田遺跡と周辺の遺跡 (1/25000)……………	4	第26図	SK070実測図 (1/30) ……………	15
第2図	県道山香院内線の計画路線と試掘調査地点 (1/5000) ……	5	第27図	SK070出土遺物実測図 (1/3) ……………	15
第3図	試掘調査出土遺物遺物 (1/3)……………	5	第28図	SK087実測図 (1/30) ……………	15
第4図	調査区位置図 (1/1200) ……………	6	第29図	SK087出土遺物実測図 (1/3) ……………	15
第5図	恒道原田遺跡遺構配置図 (1/250)……………	7	第30図	SP102実測図 (1/20) ……………	16
第6図	恒道原田遺跡1区遺構配置図 (1/150)……………	8	第31図	SP102出土遺物実測図 (1/3) ……………	16
第7図	恒道原田遺跡調査区土層断面実測図 (1/50) ……	9	第32図	SK011実測図 (1/30) ……………	16
第8図	SP005実測図 (1/20) ……………	10	第33図	SK011出土遺物実測図 (1/3) ……………	16
第9図	SP005出土遺物実測図 (1/3) ……………	10	第34図	SK131実測図 (1/30) ……………	17
第10図	SK007実測図 (1/30) ……………	10	第35図	SK131出土遺物実測図 (1/3) ……………	17
第11図	SK007出土遺物実測図 (1/3) ……………	10	第36図	SD008実測図 (1/60) ……………	18
第12図	SP013実測図 (1/20) ……………	11	第37図	SK110実測図 (1/30) ……………	18
第13図	SP013出土遺物実測図 (1/3) ……………	11	第38図	SK110出土遺物実測図 (1/3) ……………	18
第14図	SK015実測図 (1/30) ……………	11	第39図	SK113実測図 (1/30) ……………	19
第15図	SK015出土遺物実測図 (1/3) ……………	11	第40図	SX122実測図 (1/10) ……………	19
第16図	SK036実測図 (1/30) ……………	12	第41図	SA1実測図 (1/30) ……………	20
第17図	SK036出土遺物実測図……………	12	第42図	その他の遺構実測図① (1/30) ……………	21
第18図	SP106実測図 (1/20) ……………	12	第43図	その他の遺構実測図② (1/30) ……………	22
第19図	SP106出土遺物実測図 (1/3) ……………	12	第44図	その他の遺構実測図③ (1/20) ……………	23
第20図	SB1実測図 (1/50・柱穴個別図1/20) ……………	13	第45図	調査区出土遺物実測図① (1/3)……………	25
第21図	SB1出土遺物実測図 (1/3) ……………	14	第46図	調査区出土遺物実測図② (1/1・1/2・1/3)……………	26
第22図	SK004実測図 (1/30) ……………	14	第47図	調査区出土遺物実測図③ (1/3・1/1) ……………	27
第23図	SK004出土遺物実測図 (1/1) ……………	14	第48図	恒道原田遺跡出土遺物による時期区分……………	35
第24図	SP016実測図 (1/20) ……………	14	第49図	恒道原田遺跡周辺の野原村旧字図……………	36
第25図	SP016出土遺物実測図 (1/3) ……………	14	第50図	恒道自治公民館横石塔群と石祠……………	36

表 目 次

第1表	県道山香院内線試掘調査トレンチ一覧……………	5	第4表	恒道原田遺跡遺物観察表 (土製品) ……………	33
第2表	恒道原田遺跡遺構一覧表……………	28	第5表	恒道原田遺跡遺物観察表 (石器・石製品) ……………	33
第3表	恒道原田遺跡遺物観察表 (土器・陶磁器) ……………	32	第6表	恒道原田遺跡遺物観察表 (金属製品) ……………	33

図 版 目 次

図版1	恒道原田遺跡空中写真 (南東から甲ノ尾山、山香市街地を望む) 恒道原田遺跡空中写真 (北東から竜頭遺跡方面を望む) ……………	41
図版2	恒道原田遺跡1区完掘状況 (東から)・恒道原田遺跡2区完掘状況 (東から)……………	42
図版3	1区南壁土層 (部分)・2区南壁土層 (部分)・SP005・SP013・SK015半截・SK015・SK036・SK036完掘……………	43
図版4	SB1・SB1柱穴SP058土層断面・SB1柱穴SP061土層断面・SK004・SP016 ……………	44
図版5	SK070・SK087・SK011・SK131・SD008・SD008土層・SK110・SX122 (礎石) ……………	45
図版6	SA1・SA1柱穴SP118・SA1柱穴SP119・SA1柱穴SP120・SK001・SK002・SK010・SP014……………	46
図版7	遺物写真 (第13図5・第15図6・第17図7・第19図9・第21図11・第25図13・第29図15・第31図16・第38図22・ 第45図26・第45図28・第45図24) ……………	47
図版8	遺物写真 (第45図37・第45図39・第45図40・第45図42・第45図43・第45図44・第45図47・第45図48・第47図56・ 第46図49・第46図50・第46図51・第46図52・第23図12・第47図57・(図なし) 59)……………	48

第1章 調査に至る経緯と発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯

発掘調査の起因となった県道山香院内線（大分県道第42号）は、国道10号から分岐する杵築市山香町倉成の中村交差点を起点とし、宇佐市安心院町を経て宇佐市院内町円座で国道387号に接続する主要地方道である。山香院内線の起点側は、道路幅員が狭いうえに歩道が十分に確保されていないことから、大分県では「生活の安全を高める道路事業」の一環として、地域住民の安全な通行空間を確保する交通安全対策を実施し、併せて道路幅員を拡幅する道路改良事業を実施することとなった。

大分県教育委員会では、当該事業の計画段階から大分県土木建築部と埋蔵文化財の取扱いについて協議し、埋蔵文化財分布調査を実施した結果、事業箇所 の地形から遺跡が存在する可能性があることから試掘調査が必要との判断に至った。これを受けて、平成30年度に事業者である大分県土木建築部別府土木事務所から埋蔵文化財試掘調査の依頼が提出され、平成31年1月23日～24日にかけて試掘調査を実施した。その結果、一部のトレンチで柱穴状遺構を確認し、数点の土器片が出土したことから、当該範囲において本発掘調査が必要と判断された。この結果を受けて大分県教育庁文化課へ恒道原田遺跡として遺跡の新規発見を報告し、大分県遺跡台帳への登録を行うとともに、別府土木事務所と再度埋蔵文化財の取扱いを協議した結果、次年度に記録作成のための本調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査の経過

令和元年度に入り、6月27日付で別府土木事務所長から大分県立埋蔵文化財センター所長あて埋蔵文化財発掘調査（本調査）の依頼が提出された。これを受け事業者と発掘調査の実施時期や期間・経費等について調整を重ね、同年11月1日付けで発掘調査の実施計画及び所要経費見積について回答した。令和2年1月16日には大分県教育庁文化課へ文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の施行を通知するとともに、杵築市教育委員会及び杵築日出警察署へ発掘調査への協力を依頼した。

本調査の実施にあたっては、重機での表土除去、人力掘削（遺構検出・遺構発掘）、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、実測原図のデジタルトレース図作成、現場管理及び労務管理等を埋蔵文化財発掘調査支援業務として一括して民間調査組織に委託した。その一方で調査区の設定や層序の確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら受託業者に作業指示を与え、調査員が常駐して全体を指揮監督する体制をとった。支援業務委託における作業班は1班につき調査技師・調査助手各1名、作業員10名を基本とした。

本調査は令和2年1月20日に1区の表土掘削に着手し、人力による遺構検出作業、遺構発掘作業、写真及び実測図による記録作成作業、空中写真撮影を経て、2月10日に1区の埋戻しを完了した。引き続き2区の調査に着手し、2月25日の埋戻し・調査機材等の撤収をもって現地作業を終了した。2月28日には大分県教育委員会、杵築市教育委員会及び大分県土木建築部別府土木事務所へ発掘調査の終了を報告・通知するとともに、杵築日出警察署へ文化財保護法第100条第2項に基づく埋蔵文化財の発見を通知した。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等、コンテナボックスにして12箱であった。

第3節 整理作業・報告書作成の経過

発掘調査出土品の整理作業は、令和2年度に実施した。整理作業は恒道原田遺跡を含む当該年度整理実施事業を一括して「埋蔵文化財センターが実施する埋蔵文化財発掘調査に係る整理作業委託」として発注した。業務は基本作業と資料作成業務からなり、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合・復元、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測原図のトレース、遺物写真撮影、及び遺物の分けや収納等諸作業である。委託業務では作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。整理作業は令和2年6月2日～7月29日にかけて実施し、7月29日に委託成果物の提出を受け、8月11日の完了検査を経て終了した。

報告書作成にかかる遺構・遺物実測図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行い、令和3年1月に原稿を入稿し、3度の校正を経て本書を刊行した。令和3年3月末には本書を刊行し、これを以て本事業を完了した。

第4節 調査組織の構成

恒道原田遺跡の発掘調査に係る調査組織は以下のとおりである。

調査主体	大分県教育委員会		
調査機関	大分県立埋蔵文化財センター		
令和元年度	本発掘調査		
調査責任者	江田 豊（大分県立埋蔵文化財センター所長）		
調査総括	友岡信彦（大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長）		
調査事務	松本昌浩（	同	副所長兼総務課長）
	工藤慶弘（	同	総務課専門員）
	堺井裕史（	同	総務課主事） ※11月29日まで
	池見佳輔（	同	総務課主事） ※12月2日から
調査担当	横澤 慈（	同	調査第一課主査、本調査担当）
	土谷崇夫（	同	調査第一課主任、本調査担当）
発掘調査支援業務委託受託者	株式会社島田組大分営業所（調査技師 平嶋文博、調査助手 藤謙太郎）		
令和2年度	整理作業、報告書作成		
調査責任者	松本昌浩（大分県立埋蔵文化財センター所長）		
調査総括	後藤晃一（大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長兼調査第一課長）		
調査事務	稗田 淳（	同	総務課長）
	西森公誠（	同	総務課副主幹）
	池見佳輔（	同	総務課主事）
調査担当	横澤 慈（	同	調査第一課副主幹、整理作業及び報告書作成担当）
	服部真和（	同	調査第二課主査、整理作業委託監理）
整理作業委託受託者	株式会社九州文化財総合研究所（整理作業指導員 永井美香）		

なお、発掘調査期間中、以下の諸氏から現地で指導・助言を賜った。

・ 仲 和彦（杵築市教育委員会）、小柳和宏（大分県立埋蔵文化財センター）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

恒道原田遺跡の所在する杵築市山香町は、大分県の北東部、国東半島のつけ根に位置する。いわゆる平成の大合併により、旧杵築市・旧山香町・旧大田村の1市1町1村が合併し現在の杵築市となっており、北は豊後高田市、西は宇佐市、南は日出町、東は旧杵築市と旧大田村と接している。旧山香町は、東は田原山（鋸山、標高542m）、北は津波戸山（529m）・華岳（593m）、西は御許山（647m）・雲ヶ岳（654m）、南は鳥屋岳（590m）・唐木山（600m）等の山々に四方を囲まれた盆地地形を呈している。河川は南の鹿鳴越山系に源を発し、山香盆地を抜けて別府湾に注ぎ込む八坂川と、その支流である立石川が山香町の中心部で合流し、その流域を中心に谷底平野を形成している。集落はこうした河川沿いの段丘面に展開している。交通は国道10号が宇佐市から立石峠を抜けて山香盆地に入り、赤松峠を通過して日出町へ抜けている。またJR日豊本線も宇佐から国道10号に並走するように走り、八坂川に沿って旧杵築市、さらには別府・大分方面へと通じている。県道山香院内線はJR中山香駅の東方を起点とし、八坂川を遡りながら宇佐市院内町へ通じている。また、山香から北へは大田を経て国東市国見町へ通じる県道山香国見線や、豊後高田市田染を経て屋山南麓に至る県道新城山香線等の主要道が通っており、交通の要衝となっている。

第2節 歴史的環境

恒道原田遺跡周辺で確認される考古資料で最も古いものは後期旧石器時代に属するものである。大原遺跡は県立山香農業高校（平成27年3月閉校、現県立日出総合高校の農業実習施設）の建設に伴う発掘調査で石器群が出土している。また、川原田洞穴遺跡でも流紋岩製のナイフ形石器や石刃が出土している。

縄文時代の遺跡としては、川原田洞穴遺跡では、最下層の無文土器から早期押型文土器の各型式、早期後半から前期・中期の土器が層位的に出土している。特に帯状施文の押型文土器である川原田式（川原田Ⅱ式）の標識遺跡として著名である。龍頭遺跡では後期前半の貯蔵穴群が発掘され、中から多量のイチイガシが出土している。特筆される遺物に編組製品（編袋）があり、県の有形文化財に指定されている。

弥生時代の遺跡は、大原遺跡では中期の円形竪穴建物跡4基を中心とした集落が確認されている。また、龍頭遺跡でも中期から後期の土坑数基や土器が出土している。

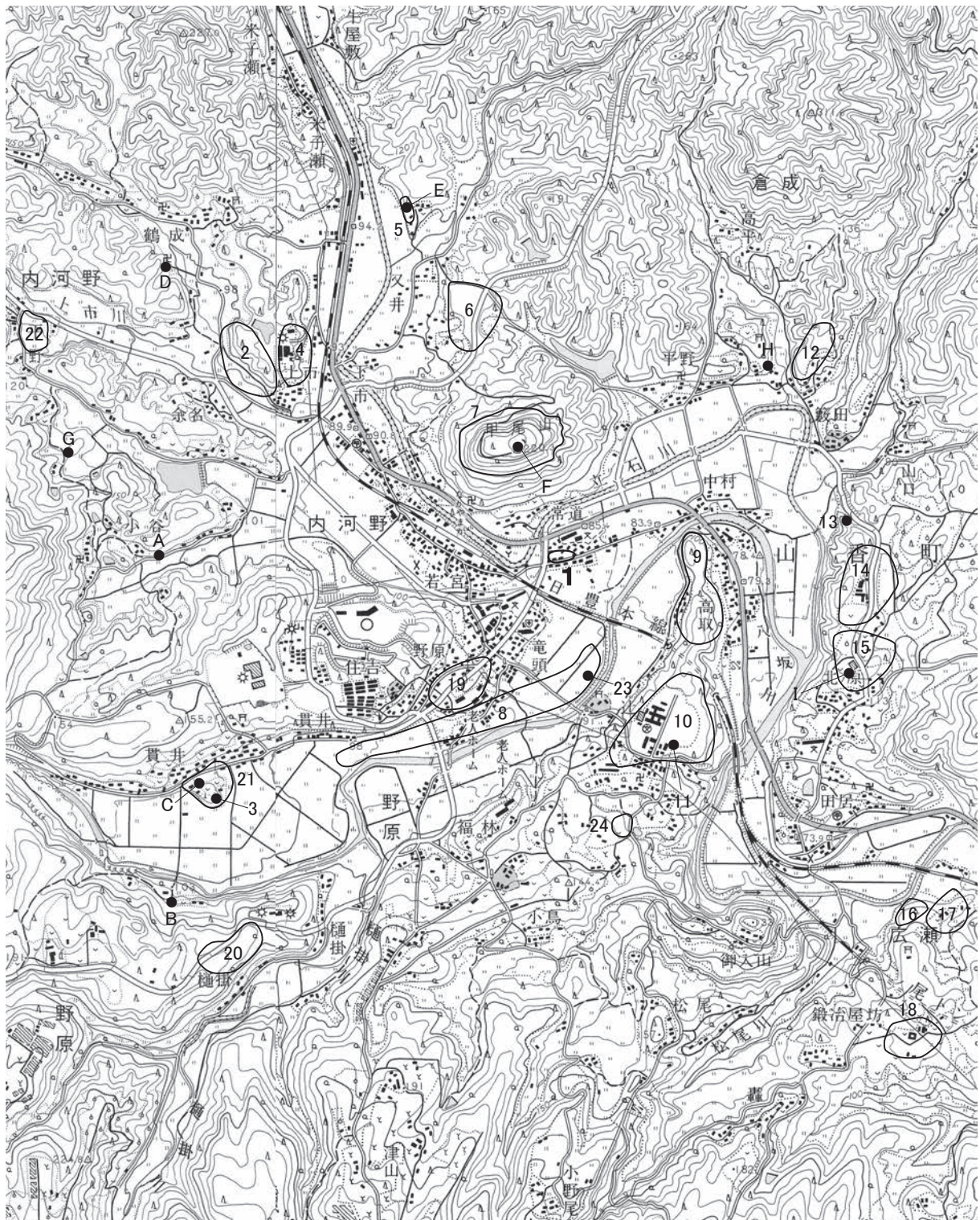
古墳時代では、大原遺跡内に所在する大原古墳は周溝を伴う古墳で、周溝から円筒埴輪や須恵器が出土している。龍頭古墳は6世紀後半の横穴式石室墳、直径10m程度の小円墳と推定される。

古代の遺跡としては、龍頭遺跡では遺構には伴わないものの、8世紀代の須恵器や土師器、格子タタキや縄目タタキを施す平瓦が出土している。須恵器の中には「土主」と判読される墨書を持つ坏がある。瓦の存在は周囲に寺院の存在を窺わせる。

中世の考古資料は少ないが、大原遺跡から中世の土師器小皿の他、13世紀代の瓦類が出土しており、中世寺院の存在が想定される。恒道原田遺跡の北には甲ノ尾城跡、東には龍ヶ鼻城跡といった中世城郭が所在する。

杵築市山香町は古代の山香郷に属し、宇佐神宮の神宮寺であった弥勒寺の荘園であったことが知られている。弥勒寺荘園の成立は10世紀後半～11世紀初頭とされ、「山香郷地頭職系図」では、山香郷は紀貞房を開発主として天徳元年（957）に開かれたと記される。中世に入り、大友氏が豊後守護として下向してくると、山香郷にも大友氏の手が及ぶようになり、14世紀後半には大友氏が山香郷司職にあったことが知られる。15世紀にはいと大友氏が在地領主を役人として支配しており、その支配機構として「山香郷両政所」（東政所・西政所）が記述され、野原氏と志手氏が郷司として知られる。このうち志手氏の拠点貫井に所在する志手氏館跡とされる。

近世の山香地域は、慶長6年（1601）に木下延俊が日出に入封すると、日出藩領として支配される。寛永19年（1642）には立石領5000石が木下延由に分知され、立石領が成立する。日出藩・立石領とも廃藩置県まで存続している。



第1図 恒道原田遺跡と周辺の遺跡 (1/25000, 国土地理院発行2万5千分の1地形図「立石」・「若宮」に加筆)

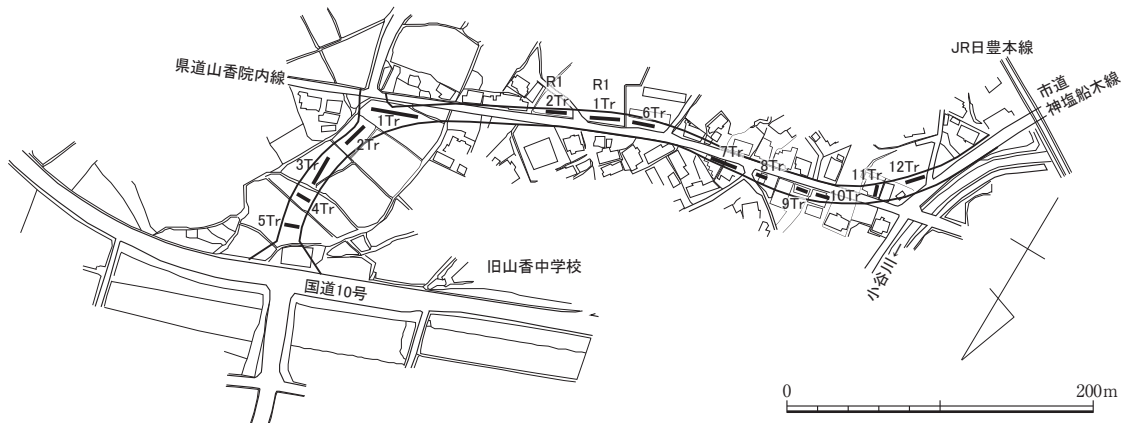
- | | | | | |
|--------------|-----------|----------|-----------|----------|
| 1 恒道原田遺跡 | 2 小松城跡 | 3 台古墳 | 4 上市遺跡 | 5 又井横穴墓群 |
| 6 又井遺跡 | 7 甲ノ尾城跡 | 8 野原石塚群 | 9 龍ヶ鼻城跡 | 10 大原遺跡 |
| 11 大原古墳 | 12 向山口遺跡 | 13 赤迫古墳 | 14 徳野遺跡 | 15 北ノ原遺跡 |
| 16 川原田洞穴遺跡 | 17 二ノ尾遺跡 | 18 南部遺跡 | 19 龍頭遺跡 | 20 樋掛城跡 |
| 21 志手氏館跡 | 22 神ノ前遺跡 | 23 竜頭古墳 | 24 下二ノ尾遺跡 | |
| A 石造宝塔 (国東塔) | B 下仲尾宝篋印塔 | C 貫井宝篋印塔 | D 東光寺石殿 | E 又井磨崖仏 |
| F 甲尾山宝篋印塔胴部 | G 普門坊板碑 | H 倉成磨崖仏 | I 北の原古墳 | |

第3章 発掘調査の成果

第1節 試掘調査の概要

発掘調査の起因となった県道山香院内線道路改良事業は、県道の起点である中村交差点の北西に位置する倉成交差点を新たに起点とし、県道の現道との間に道路を新設し、恒道区の集落内は現道を拡幅して小谷川の手前で市道神塩船木線に接続する計画である（第2図）。この計画区間の地形を観察すると、道路を新設する部分は八坂川や立石川沿いに広がる谷底平野で、主に水田として利用されている。一方、恒道区の集落部分は山香台地と通称される砂礫台地の北端部に位置している。この山香台地上には杵築市山香庁舎や杵築市立山香中学校、杵築市立山香病院等の山香町の中心的な施設があり、縄文時代の貯蔵穴群が検出された龍頭遺跡も同一台地上にある。杵築市山香庁舎や山香中学校のあたりは小高い丘陵となり、その麓から低い台地が北東に細長い尾根状に突き出している。

試掘調査は平成30年度と令和元年度に実施した。調査は重機を1台使用し、事業地内にトレンチを設定して堆積土を薄く削りながら遺構・遺物の有無を確認する方法で行った。1～5トレンチは低地水田部に、6～12トレンチは集落内の宅地部分に設定した。その結果、水田部1～5トレンチでは水田層・床土を除去すると黄褐色や灰褐色の堆積土が認められ、その下で砂礫層を確認した。遺物は耕作土中から近世陶磁器を中心に少量出土したがいずれも細片で、土器類はかなりの摩滅を受けていた。一部では旧河道と思われる堆積層も認められることから、八坂川の氾濫層が一带に広がっていると想定された。宅地部に設定したトレン

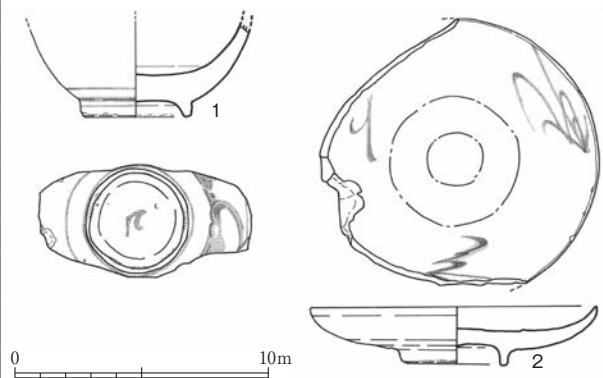


第2図 県道山香院内線の計画路線と試掘調査地点（1/5000）

調査年度	トレンチ番号	概要	出土遺物
平成30年度	1	地表-1.0mで砂礫層、一部流路の堆積あり	
	2	地表-1.2mで砂礫層	
	3	地表-1.0mで砂礫層	土器、須恵器、陶磁器
	4	地表-1.2mで砂礫層	土器
	5	地表-1.0mで砂礫層、一部流路の堆積あり	
	6	地表-1.0mまで盛土、その下は水田層	
	7	地表-0.2mで灰白色の地山層、全体に削平	磁器
	8	地表-0.5mで黄褐色土の地山、旧宅地攪乱層	磁器
	9	地表-0.7mで黄褐色土の地山、地山面でピット1基検出	土器、須恵器
	10	地表-0.75mで黄褐色土の地山、地山直上は近世水田層	土器、陶器
	11	地表-0.6mで黄褐色礫混土の地山	
	12	地表-0.6mで淡黄白色土の地山	
令和元年度	1	地表-1.0mで砂礫層	白磁玉縁碗
	2	地表-1.0mで砂礫層	

※アミかけは本調査対象トレンチ

第1表 県道山香院内線試掘調査トレンチ一覧



第3図 試掘調査出土遺物実測図（1/3）

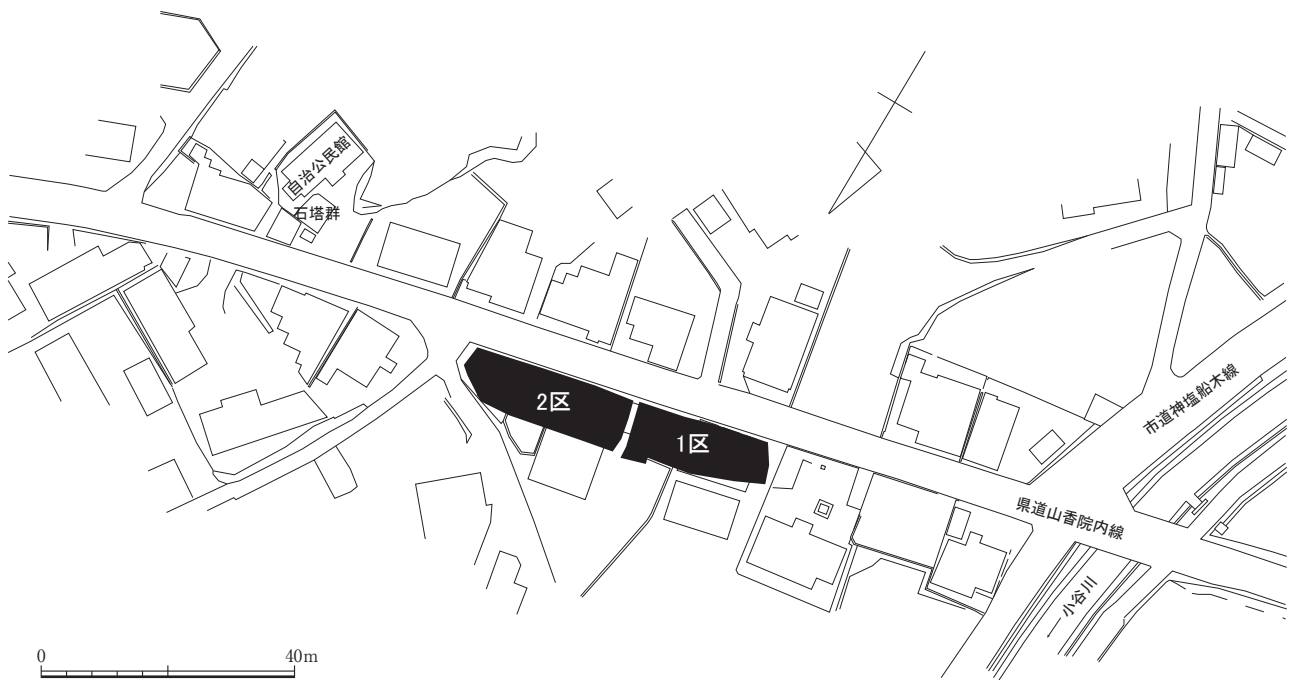
チでは、7トレンチは近世磁器が出土したが、表土下で硬質の黄白色粘質土の地山を確認し、かなりの削平を受けている状況が窺えた。8～10トレンチでは中世～近世の遺物が出土し、10トレンチでは柱穴1基を検出した。小谷川寄りの11・12トレンチでは表土及び水田層を除去すると地山層に達し、遺構・遺物ともに確認されなかった。これを踏まえて、遺物が出土し、かつ黄褐色土の地山層が良好に残る8～10トレンチの間について、本調査が必要であるとの判断に至った。

令和元年度は前回未買収であった低地水田部（5～6トレンチ間）に2箇所のトレンチを設定して試掘調査を行った。その結果、前回同様に砂礫混じりの氾濫層を確認し、遺構は確認されなかった。

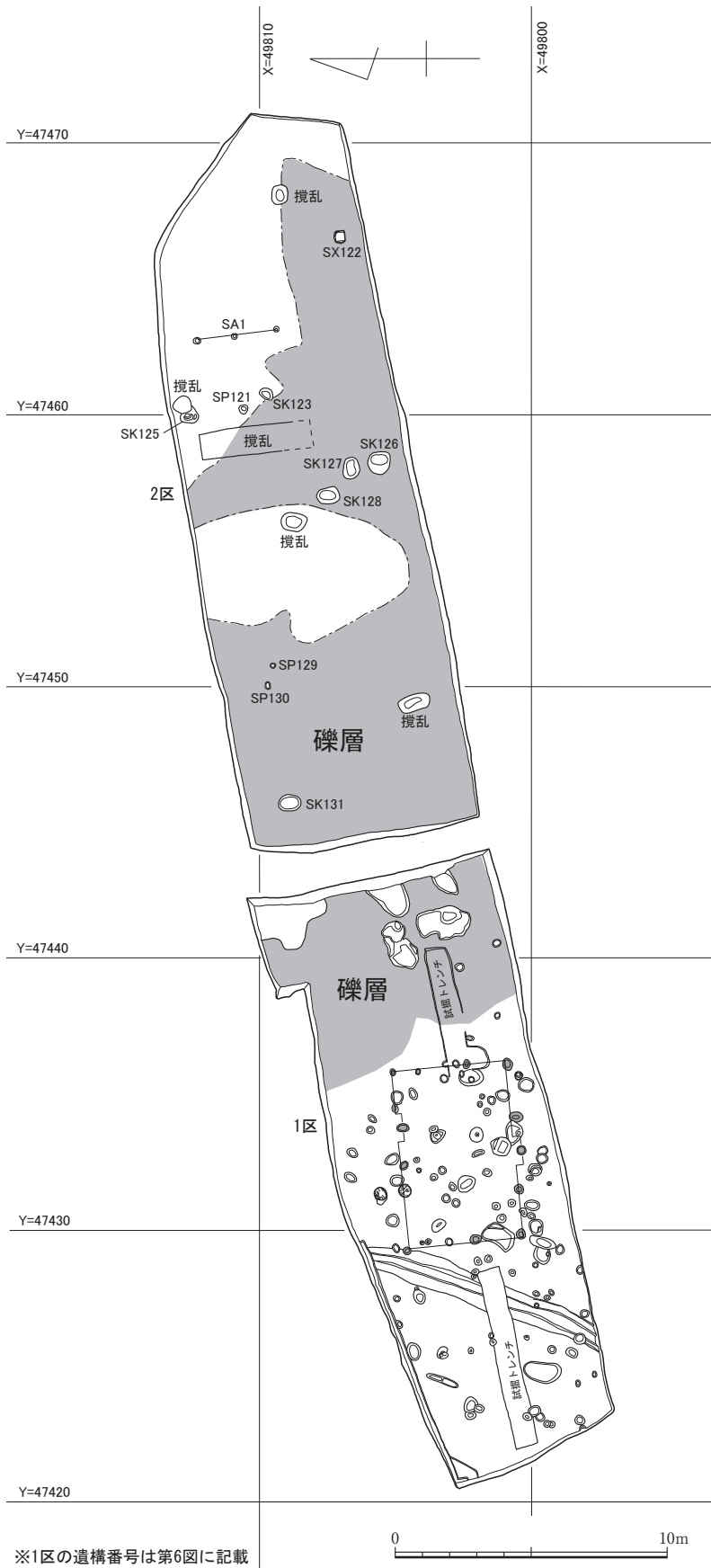
第3図は平成30年度試掘調査時の出土遺物である。1は肥前系の染付磁器碗で、高台内に簡略化した銘款が見られる。7トレンチからの出土である。2は肥前系染付磁器皿で、見込は蛇の目釉剥ぎを施す。8トレンチの攪乱層から出土しており、本調査の2区に帰属する。

第2節 本発掘調査の概要

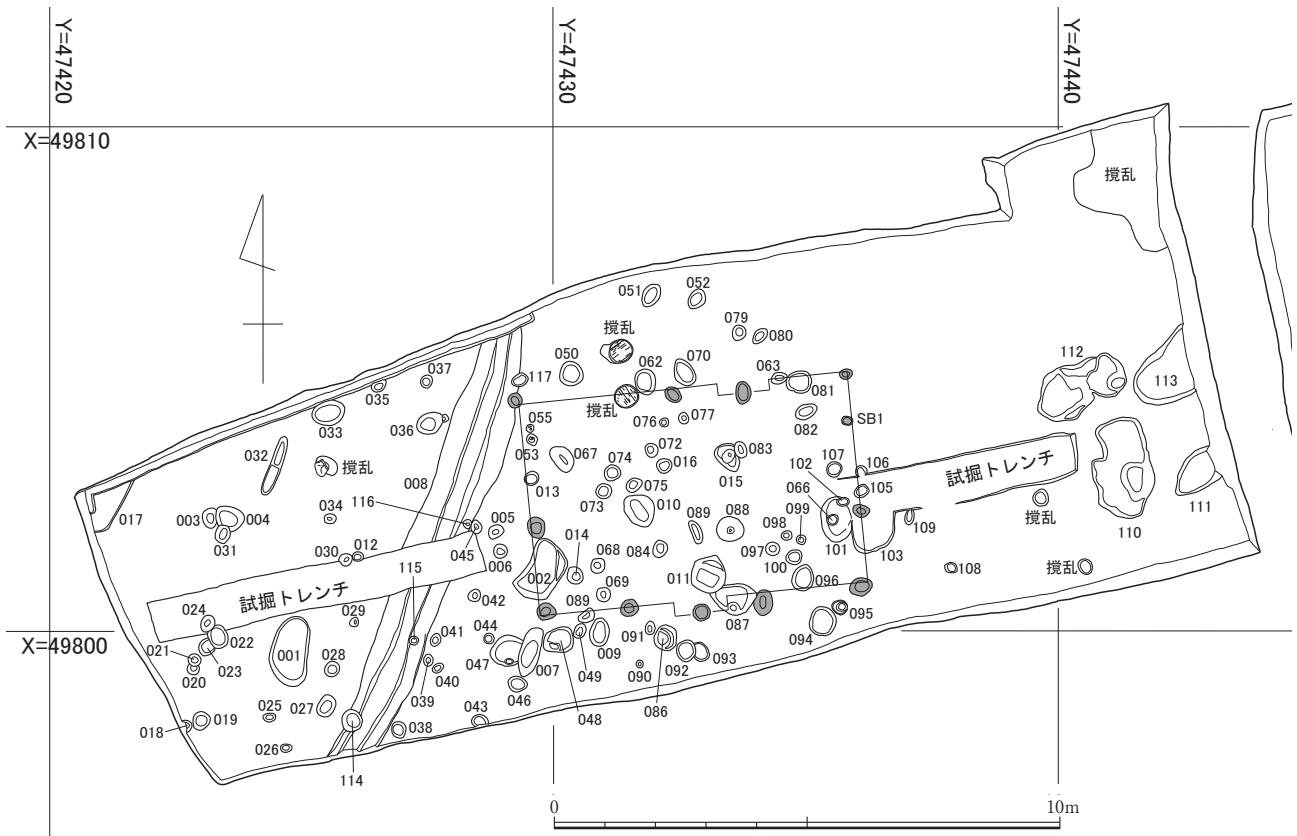
恒道原田遺跡の本調査対象となったのは約450㎡である。調査にあたって、本調査箇所のほぼ中央に、埋設水道管が調査区を横断していることから、この部分を残して1区と2区に分けて調査区を設定した。発掘調査では、排土置き場を確保する必要から、この1区と2区で切り返して行き、まず西側の1区の調査から着手し、その後に2区の調査を行った。本調査では、試掘調査の所見から遺構検出面より上は近世以降の水田層で、有意な遺物包含層が認められないこと、宅地部では盛土や攪乱層が厚く堆積しているため、遺構検出面までの堆積層を重機で慎重に剥ぎ取った。次いで作業員を投入し人力で遺構検出作業を行い、検出した遺構の掘り下げを行った。検出した遺構は、明らかな攪乱を除き全てに検出した順に「S-●●●」の遺構番号を付与した。遺構の性格による遺構略号は報告書作成時に付したが、遺構番号は調査時のものをそのまま踏襲したため、遺構種別ごとに番号の振り直しは行っていない。検出した遺構は写真撮影および実測図により記録した。表土の機械掘削や遺構検出の際に出土した遺物は、調査範囲が狭小であることから各調査区で一括して取り上げた。遺構発掘完了後、1区についてはマルチコプターによる空中写真撮影を行い、最後に調査区を埋め戻して調査を完了した。



第4図 調査区位置図 (1/1200)



第5図 恒道原田遺跡遺構配置図 (1/250)



第6図 恒道原田遺跡1区遺構配置図 (1/150)

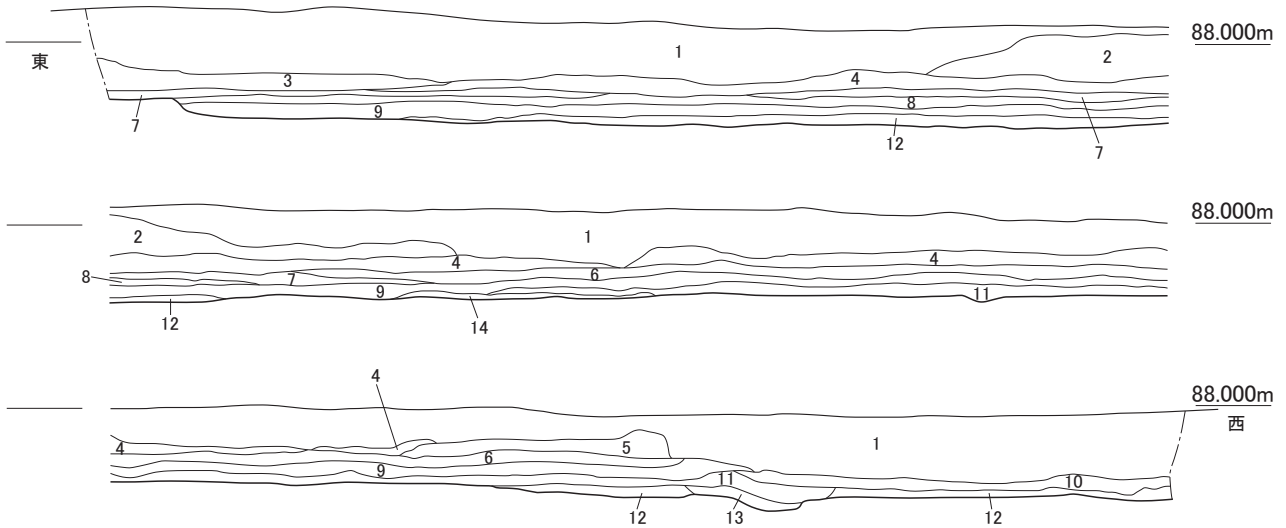
第3節 調査区の土層

恒道原田遺跡の土層断面実測図を第7図に示す。

1区の堆積土層は13層に細分される。第Ⅰ層は表土及び盛土層である(第7図①の1～3層)。層厚は均一ではないが概ね20～30cm程度で、調査区西端部は攪乱が著しく50cmの厚さを持つ。第Ⅱ層は水田層で、黄灰色粘質土を基調として色調の差や混入するマンガンや酸化鉄分の多寡によって8層に細分される(同4～11層)。層厚は約30cmで、西端部は攪乱による削平で10cm程度と薄い。第Ⅲ層は地山の明黄褐色粘質土と第Ⅱ層の黄灰色粘質土が混じった層で、粘性は強い(同12・13層)。弥生時代～中世を中心とした遺物包含層で、細片化した遺物が地山面に貼りつくよう出土する。主に調査区の西半部に認められ、礫質の地山土となる東半部には分布しない。層厚は10cm未満と薄い。第Ⅳ層は明黄褐色粘質土の地山で、遺構の多くはこの層の上面で検出している。

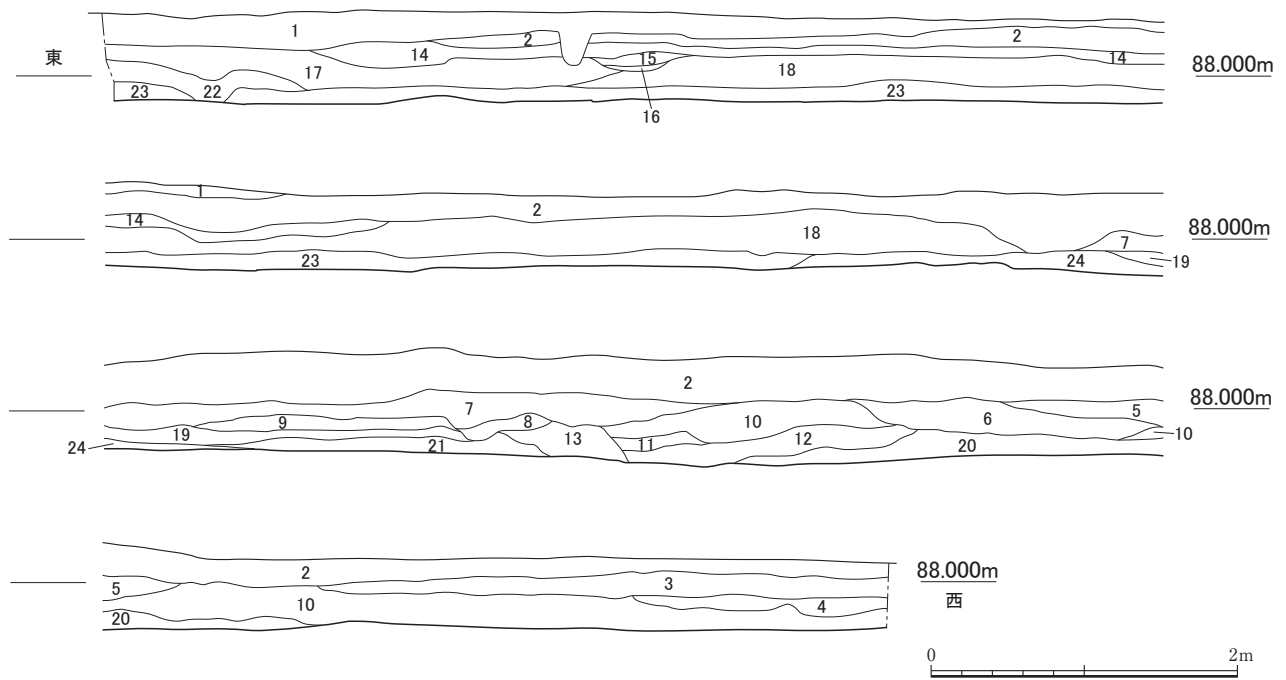
2区は宅地跡であったため全体的に土層の攪乱が著しい。第Ⅰ層は土色や土質の違い、混入物の差から20層に細分されるが、いずれも宅地の盛土整地層及び攪乱土である(第7図②の1～20層)。層厚は約40～70cmを測る。第Ⅱ層は浅黄色粘質土(同21層)及び灰黄色粘質土(同22層)、黄灰色粘質土(同23層)、褐灰色粘質土(同24層)で、調査区の東側にわずかに残る。層厚は10cm前後ほどしかない。第Ⅲ層は灰黄褐色粘質土及び拳大～人頭大の礫を主体とする地山である。

① 1区南壁土層



- | | |
|------------------------------------|---|
| 1. 表土(耕作土及び盛土) | 8. 黄灰色粘質土(2.5Y6/1) 酸化鉄分少量、マンガン微量含む |
| 2. 黒褐色砂質土(10YR3/2) 粘性弱い | 9. 黄灰色粘質土(2.5Y6/1) 酸化鉄分多量、マンガン少量含む |
| 3. 灰白色粘質土(10YR7/1) 酸化鉄分微量含む | 10. 黄灰色粘質土(2.5Y4/1) 酸化鉄分微量含む |
| 4. 黄灰色粘質土(2.5Y5/1) 酸化鉄分、微量のマンガン含む | 11. 黄灰色粘質土(2.5Y5/1) 酸化鉄分・マンガン少量含む |
| 5. 黄灰色粘質土(2.5Y4/1) 酸化鉄分多量、マンガン微量含む | 12. 黄灰色粘質土(2.5Y6/1) 明黄褐色土(10YR6/6)ブロック混じり、酸化鉄分・マンガン少量含む |
| 6. 黄灰色粘質土(2.5Y5/1) 酸化鉄分多量、マンガン少量含む | 13. 明黄褐色粘質土(10YR6/6) 黄灰色土(2.5Y6/1)ブロック少量混じり、酸化鉄分・マンガン含む |
| 7. 黄灰色粘質土(2.5Y6/1) 酸化鉄分多量含む | |

② 2区南壁土層



- | | |
|---|--|
| 1. 黒褐色粘質土(10YR3/1) | 13. にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3) |
| 2. 褐灰色粘質土(10YR4/1) | 14. にぶい黄褐色粘質土(10YR5/4) 褐灰色土(10YR5/1)混じり |
| 3. 褐灰色粘質土(10YR4/1) 明黄褐色砂質土(10YR6/6)が少量混じる | 15. 明黄褐色粘質土(10YR6/6) |
| 4. 褐灰色粘質土(10YR5/1) 明黄褐色砂質土(10YR6/6)が多量混じる | 16. にぶい黄褐色粘質土(10YR5/3) |
| 5. 褐灰色粘質土(10YR6/1) | 17. 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) 大礫少量、小礫多量含む |
| 6. 黒褐色粘質土(10YR3/1) 小礫・廃材混じり | 18. 灰黄褐色粘質土(10YR4/2) 大礫少量、小礫多量含む |
| 7. 褐灰色粘質土(10YR6/1) 小礫多量含む | 19. 灰白色粘質土(2.5Y7/1) 酸化鉄分少量含む |
| 8. 灰白色粘質土(5Y7/1) 酸化鉄分多量含む | 20. 暗灰黄色粘質土(2.5Y5/2) 酸化鉄分含む |
| 9. 灰白色粘質土(5Y7/1) マンガン少量、酸化鉄分含む | 21. 浅黄色粘質土(2.5Y7/3) |
| 10. 黒褐色粘質土(10YR3/1) 小礫少量、マンガン多量含む | 22. 灰黄色粘質土(2.5Y7/2) マンガン多量含む |
| 11. 黒褐色粘質土(10YR3/1) 酸化鉄分多量含む | 23. 黄灰色粘質土(2.5Y6/1) 明黄褐色土(10YR6/6)少量混じり、酸化鉄分多量含む |
| 12. 褐灰色粘質土(10YR4/1) 酸化鉄分含む | 24. 褐灰色粘質土(10YR5/1) 酸化鉄分含む |

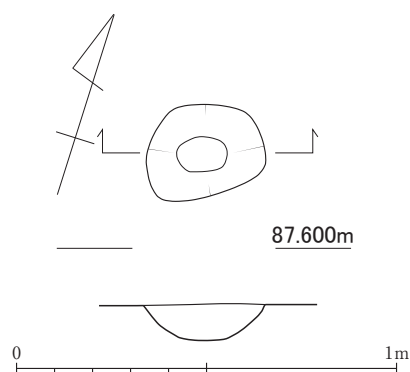
第7図 恒道原田遺跡調査区土層断面実測図(1/50)

第4節 遺構と遺物

(1) 弥生時代～古墳時代初頭の遺構

SP005 (第8図)

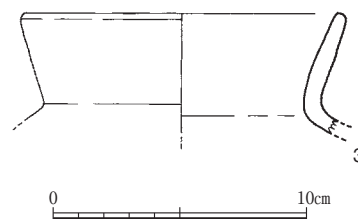
1区で検出したピットである。平面形状は略楕円形を呈し、長径0.34m、短径0.24m、深さ0.09mを測る。埋土は地山の明黄褐色土が少量混じる灰黄色粘質土である。遺物は弥生土器が出土している。



第8図 SP005実測図 (1/20)

SP005出土遺物 (第9図)

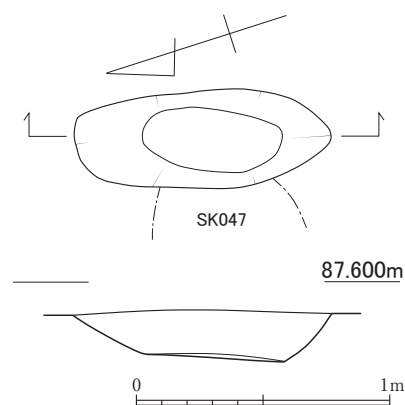
3は弥生土器の甕である。口縁部は外に開き、端部に面を持つ。



第9図 SP005出土遺物実測図 (1/3)

SK007 (第10図)

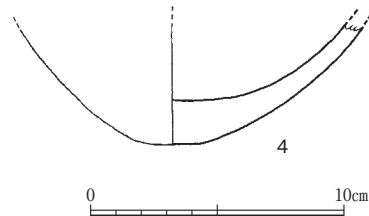
1区で検出した土坑である。SK047と重複するが、SK007がSK047を切っている。平面形状は南北に細長い楕円形状を呈し、長径1.02m、短径0.39m、深さ0.20mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、上面にマンガンの沈着が認められる。遺物は弥生土器の他に土師器が出土しており、古墳時代初頭頃の遺構と判断される。



第10図 SK007実測図 (1/30)

SK007出土遺物 (第11図)

4は弥生土器壺の底部で、底面はわずかに平底となる。



第11図 SP007出土遺物実測図 (1/3)

SP013 (第12図)

1区で検出したピットである。平面形状は円形を呈し、長径0.29m、短径0.28m、深さ0.17mを測る。埋土は褐色土で、マンガン及び黄色風化礫が少量混じる。遺構の中央部に弥生土器の壺が据えられたような状態で出土した。

SP013出土遺物 (第13図)

5は弥生土器の壺である。胴部上半及び底部を欠失する。

SK015 (第14図)

1区で検出した土坑である。SP083に一部を切られるが、平面形状は卵形を呈し、長径0.61m、短径0.38m以上、深さ0.12mを測る。底面は中央が一段円形に深く掘り込まれ、その位置で弥生土器を正位置で据えたような状態で出土したが、口縁部と底部を欠いている。埋土はにぶい黄褐色粘質土で、マンガンが少量混じる。

SK015出土遺物 (第15図)

6は弥生土器甕の底部である。底面は丸底化している。

SK036 (第16図)

1区で検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈するが、一端が東側に小さく張り出している。この張り出し部分は床面よりも一段高くなっていることから、本来は土坑とピットの重複であった可能性もある。埋土は灰黄色土混じりの明黄褐色粘質土で、上部にマンガンが沈着している。土坑内からは弥生土器の壺が

出土している。本来は倒置した状態で埋められた壺が、後世に上部を削平されたために下側だけが残存したものであろう。また、張り出し部分からは弥生土器の底部片が出土しているが、先の壺とは別個体とみられる。

SK036出土遺物（第17図）

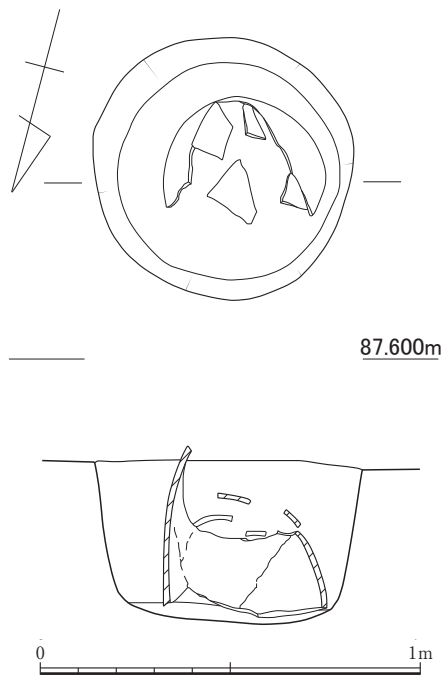
7は弥生土器の壺である。口縁部は外反し、端部は断面三角形状に肥厚する。8は壺の底部で、底面は丸底化している。

SP106（第18図）

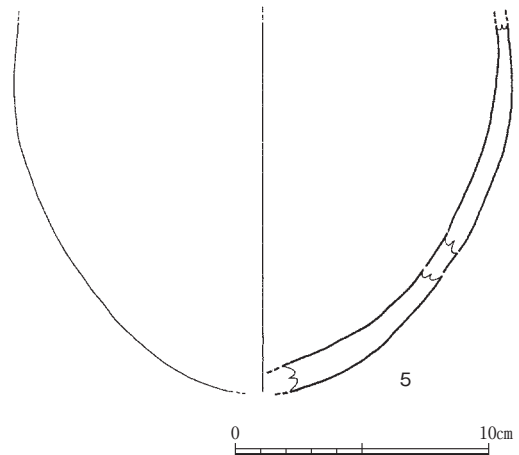
1区で検出したピットである。南端部を試掘調査トレンチで失うが、平面形状は円形を呈し、長径0.24m、短径0.18m以上、深さ0.07mを測る。埋土は灰黄色土混じりの明黄褐色粘質土で、上部にマンガンの沈着が認められる。ピット北側の壁際から弥生土器の甕片が出土している。

SP106出土遺物（第19図）

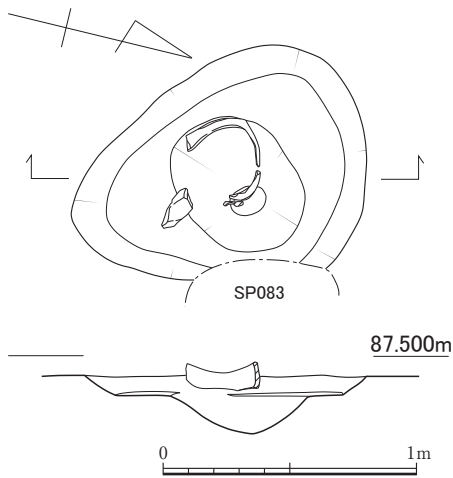
9は弥生土器の甕である。全体に磨滅しているが、肩部にタタキの痕跡が残る。



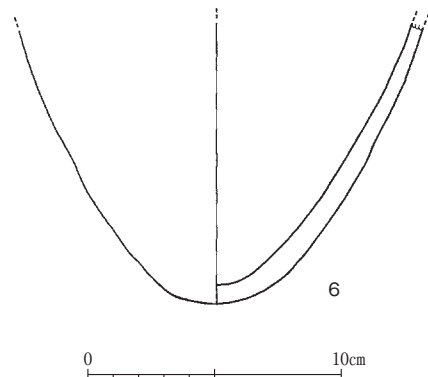
第12図 SP013実測図 (1/20)



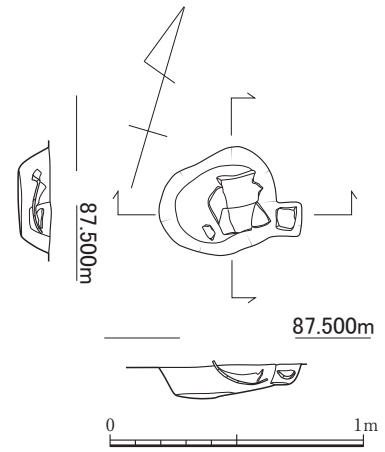
第13図 SP013出土遺物実測図 (1/3)



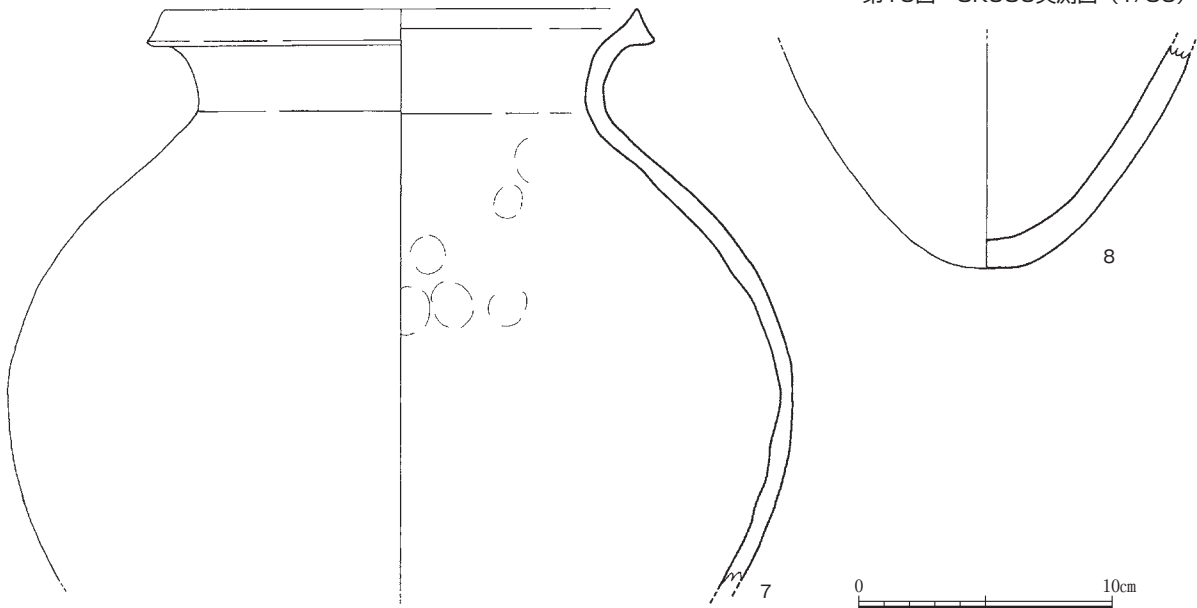
第14図 SK015実測図 (1/30)



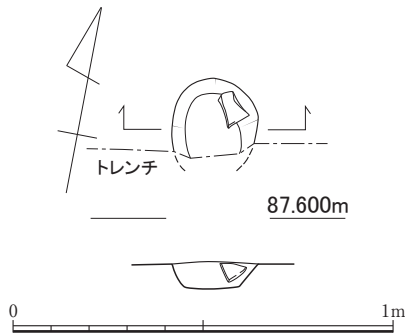
第15図 SK015出土遺物実測図 (1/3)



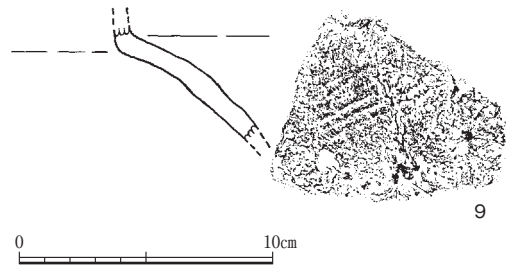
第16図 SK036実測図 (1/30)



第17図 SP036出土遺物実測図 (1/3)



第18図 SP106実測図 (1/20)

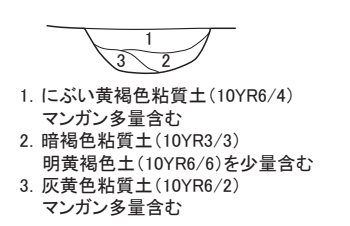
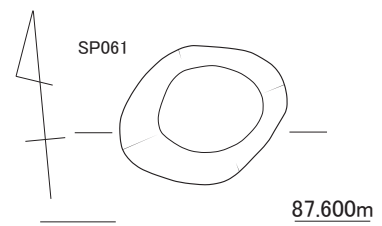
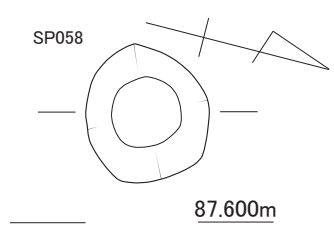
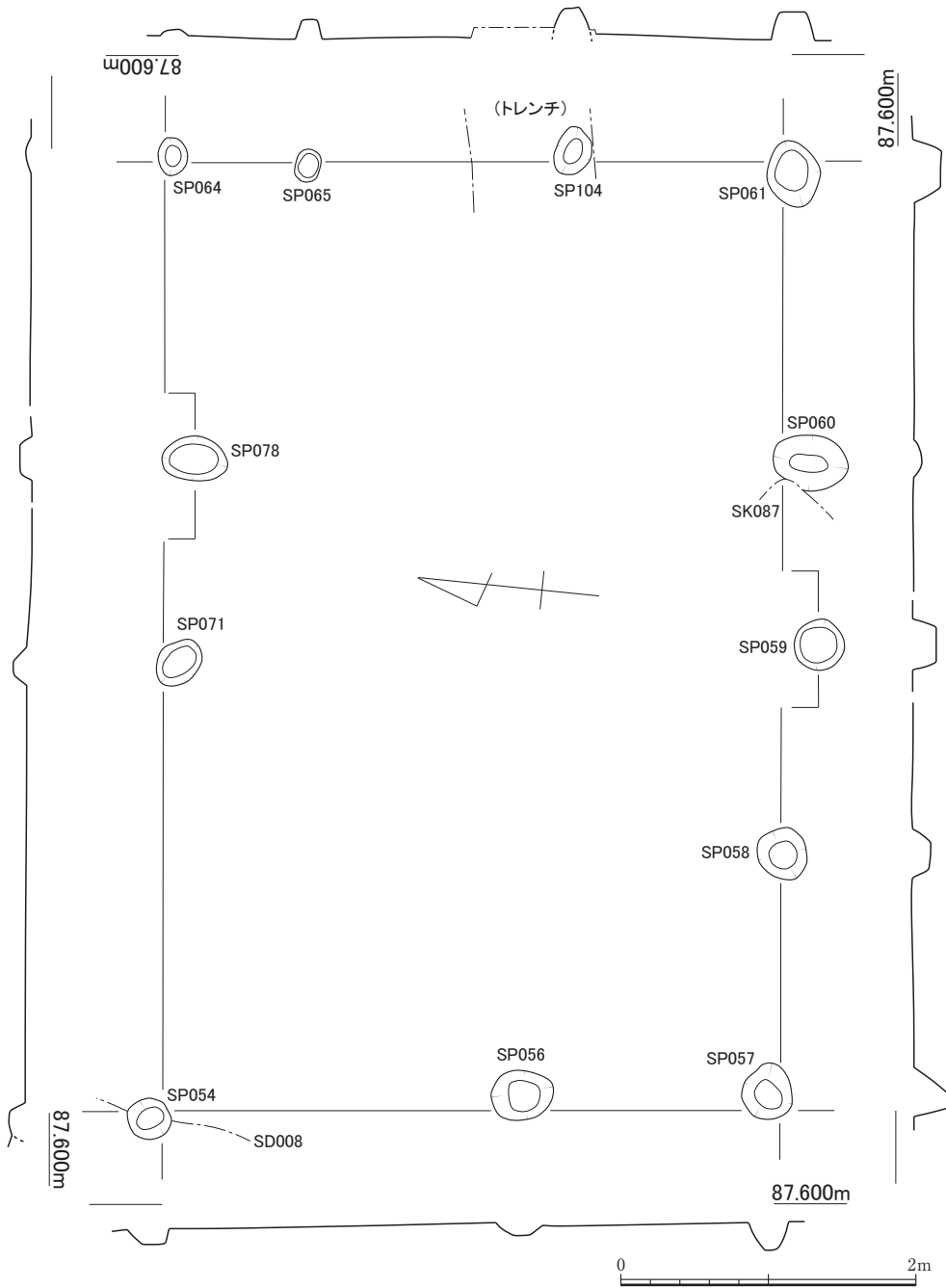


第19図 SP106出土遺物実測図 (1/3)

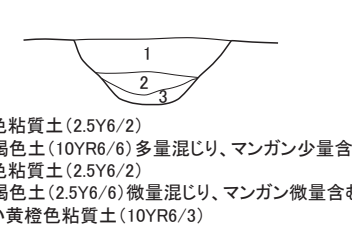
(2) 古墳時代後期～古代の遺構

SB1 (第20図)

1区で検出した掘立柱建物である。柱穴はSP054・056・057・058・059・060・061・064・065・071・078・104の12基で構成するが、SP054-056間とSP054-071間是他より間隔が広く、本来はここに柱穴があった可能性がある。桁行4間×梁行3間で、主軸はN-86°-Eと東に振れる。埋土はにぶい黄褐色土、明黄褐色土、褐灰色土、褐色土などが見られる。遺物は土師器や須恵器が出土しているが、出土量は少なく、また細片がほとんどである。柱穴の一部は他の遺構と重複しており、SP054はSD008に、SP060はSK087にそれぞれ切られる。遺構の時期を明確に示す遺物に乏しいが、SP061から須恵器が出土していること、古墳時代後期～古代頃の土坑であるSK087に切られることから、ここに位置づける。



1. にぶい黄褐色粘質土(10YR6/4)
マンガン多量含む
2. 暗褐色粘質土(10YR3/3)
明黄褐色土(10YR6/6)を少量含む
3. 灰黄色粘質土(10YR6/2)
マンガン多量含む



1. 灰黄色粘質土(2.5Y6/2)
明黄褐色土(10YR6/6)多量混じり、マンガン少量含む
2. 灰黄色粘質土(2.5Y6/2)
明黄褐色土(2.5Y6/6)微量混じり、マンガン微量含む
3. にぶい黄褐色粘質土(10YR6/3)
明黄褐色土(10YR6/6)微量混じり



第20図 SB1実測図 (1/50・柱穴個別図1/20)

SB1出土遺物 (第21図)

SB1出土として図示したものはいずれもSP061からの出土である。10は土師器甕で、口縁は外反し端部は丸くおさめる。11は須恵器甕の胴部で、外面にタタキ痕、内面に同心円当具痕が残る。

SK004 (第22図)

1区で検出した土坑である。3基の遺構が重複しており、SK004はSP003を切り、SP031に切られている。平面形状は卵形を呈し、長径0.58m、短径0.45m以上、深さ0.16mを測る。埋土は上下2層に細分され、上層は灰褐色粘質土で上部にマンガンが沈着し、下層は微量のマンガンを含む黄灰色粘質土である。遺物は須恵器、土師器の細片の他、打製石鎌が1点出土している。

SK004出土遺物 (第23図)

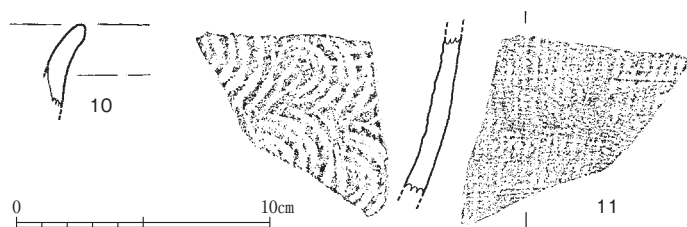
12はチャート製の打製石鎌である。長さ1cm弱の小型品で、縄文時代前半期の所産であろう。

SP016 (第24図)

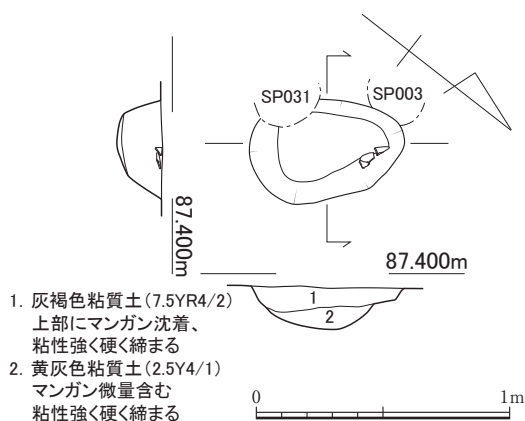
1区で検出したピットである。平面形状は略円形を呈し、直径0.29m、深さ0.11mを測る。埋土は粘性が強く酸化鉄分の混じる褐色粘質土で、上部にマンガンの沈着が認められる。遺物は土師器の甕片が内面を上にした状態で出土している。

SP016出土遺物 (第25図)

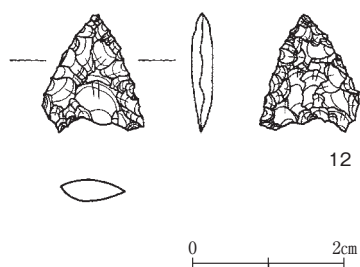
13は土師器の甕である。口縁部と底部を欠くが、破片上部に把手の基部が残る。外面は縦位のハケ目、内面は縦方向のケズリを施す。



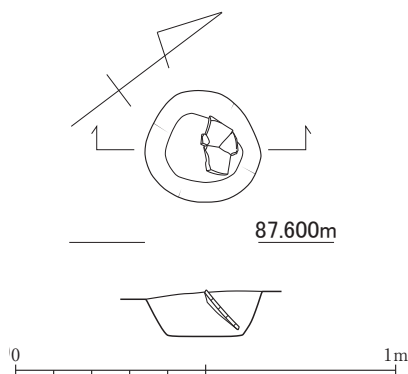
第21図 SB1出土遺物実測図 (1/3)



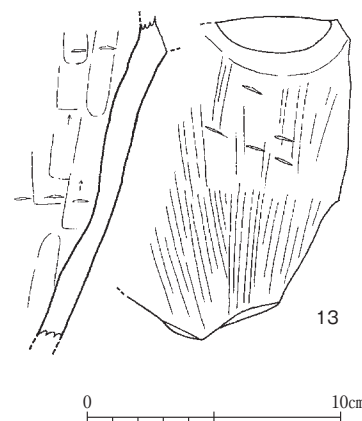
第22図 SK004実測図 (1/30)



第23図 SK004出土遺物実測図 (1/1)



第24図 SP016実測図 (1/20)



第25図 SP016出土遺物実測図 (1/3)

SK070 (第26図)

1区で検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長径0.57m、短径0.40m、深さ0.18mを測る。埋土は2層に分けられ、上層は少量の明黄褐色土及びマンガンの混じる灰黄色粘質土、下層は灰黄色粘質土の多量に混じる明黄褐色粘質土である。遺物は土師器片が出土している。

SK070出土遺物 (第27図)

14は土師器の甕である。全体に摩滅が著しく、調整等は不明である。

SK087 (第28図)

1区で検出した土坑である。SB1の柱穴SP060を切り、西側の一部をSK011に切られる。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長径0.93m以上、短径0.63m、深さ0.09mを測る。床面はほぼ平坦であるが、南端部にはピット状の掘り込みを持つ。埋土は灰黄色土混じりの明黄褐色粘質土で、上部にマンガンの沈着が認められる。遺物は南端部付近から須恵器甕の胴部片が出土している。

SK087出土遺物 (第29図)

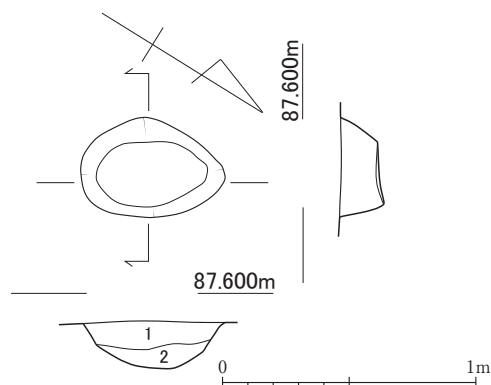
15は須恵器の甕である。丸底の底部付近の破片で、外面にはタタキ痕の後カキ目、内面には同心円当具痕が全体に残る。

SP102 (第30図)

1区で検出したピットである。SK101と重複しており、SP102がSK101を切っている。平面形状は楕円形を呈し、長径0.25m、短径0.17m、深さ0.04mを測る。埋土は灰黄色土混じりの明黄褐色粘質土で、上部にマンガンの沈着が認められる。遺物は弥生土器と須恵器片が出土している。

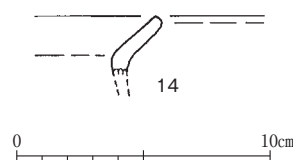
SP102出土遺物 (第31図)

16は須恵器の甕である。外面にはタタキ痕の後カキ目、内面には同心円当具痕が全体に残る。色調や胎土、磨滅具合等、SK087出土のものに似ており、同一個体の可能性がある。

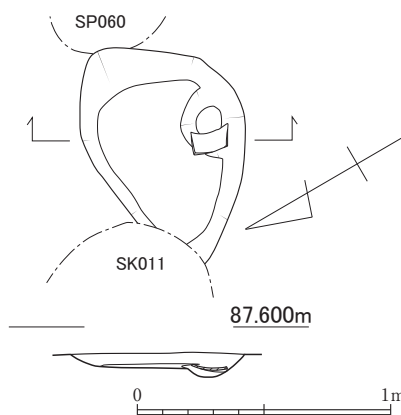


1. 灰黄色粘質土(2.5Y6/2)
多量の明黄褐色粘質土(10YR6/6)混じり、
少量のマンガン含む
2. 明黄褐色土粘質土(10YR6/6)
多量の灰黄色粘質土(2.5Y6/2)混じり、
微量のマンガン含む

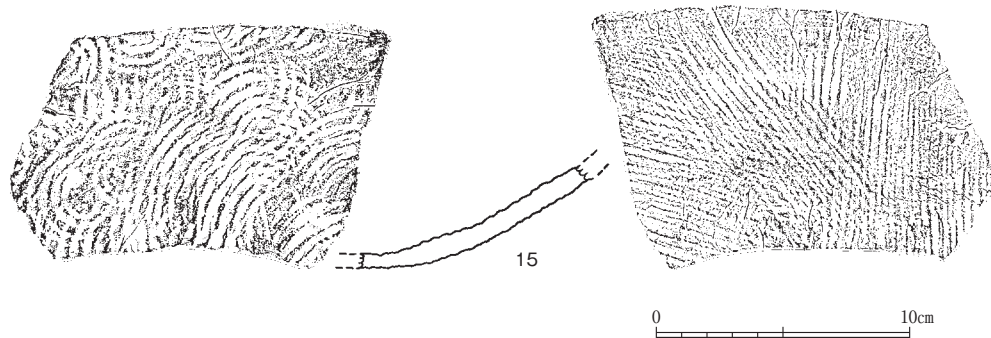
第26図 SK070実測図 (1/30)



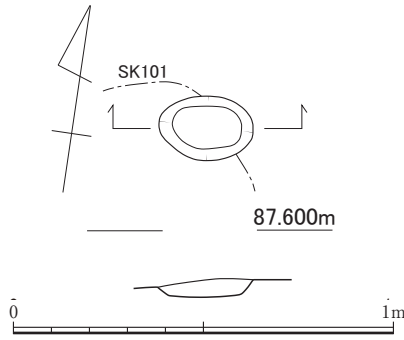
第27図 SK070出土遺物実測図 (1/3)



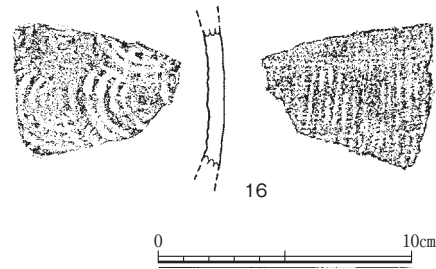
第28図 SK087実測図 (1/30)



第29図 SK087出土遺物実測図 (1/3)



第30図 SP102実測図 (1/20)



第31図 SP102出土遺物実測図 (1/3)

(3) 中世の遺構

SK011 (第32図)

1区で検出した土坑である。SK087と重複しており、SK011がSK087を切っている。平面形状はやや歪な円形を呈し、北端部がやや尖る。長径0.76m、短径0.73m、深さ0.22mを測る。内部は二段掘りとなっており、北側に一段浅いテラス状の段が付く。埋土は3層あり、第1層は明黄褐色粘質土、第2層は1層と黒褐色砂質土の混じる灰黄色粘質土、第3層は少量の灰黄色粘質土を含む浅黄橙色粘質土である。遺物は須恵器の他、検出面から瓦器碗の細片が出土している。瓦器碗の出土と、古墳時代の土坑SK087との切り合いから、中世の遺構と判断する。

SK011出土遺物 (第33図)

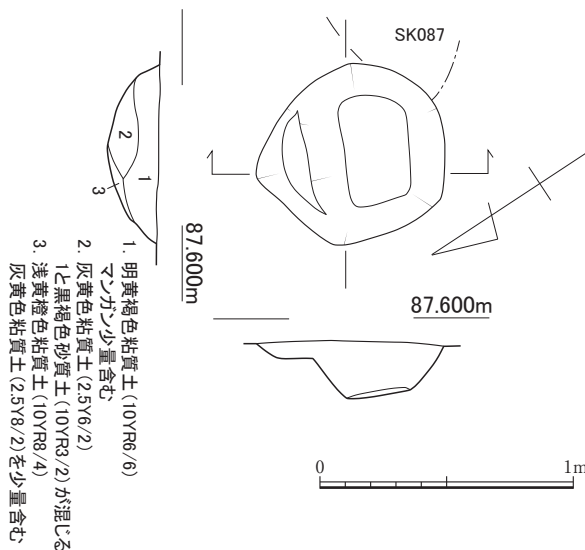
17は須恵器の坏蓋である。頂部及び口縁端部を欠失するが、口縁端部は下方に短く折れ、頂部には摘みが付くものである。外面にヘラ記号状の刻線がある。18は瓦器碗の細片で、検出面から出土した。

SK131 (第34図)

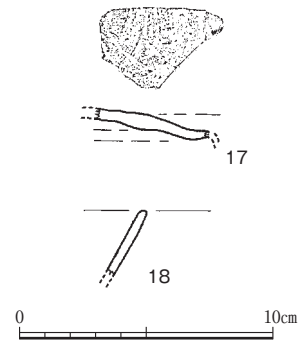
2区で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長径0.83m、短径0.60m、深さ0.21mを測る。埋土は2層あり、上層は少量の灰褐色土が混じる明黄褐色粘質土、下層は黒褐色粘質土である。上層は耕作土に近い灰褐色土が混じることから後世の堆積層である可能性があり、下層がこの土坑の本来の堆積土である可能性が高い。遺物は瓦質土器及び土器片が少量出土している。

SK131出土遺物 (第35図)

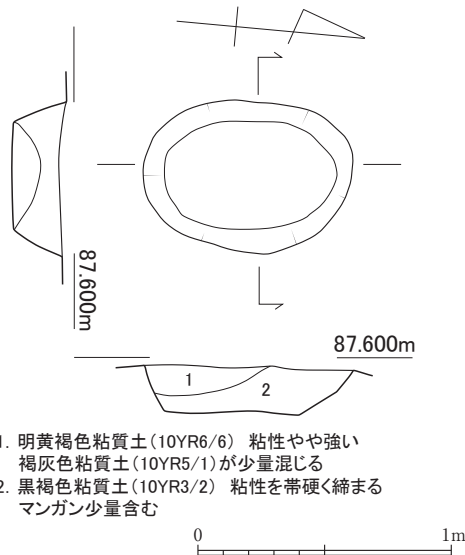
19は瓦質土器の鍋である。口縁は外反し、端部に面を持つ。



第32図 SK011実測図 (1/30)

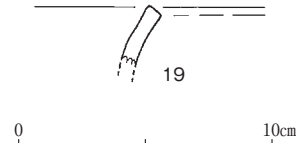


第33図 SK011出土遺物実測図 (1/3)



1. 明黄褐色粘質土(10YR6/6) 粘性やや強い
褐灰色粘質土(10YR5/1)が少量混じる
2. 黒褐色粘質土(10YR3/2) 粘性を帯硬く締まる
マンガン少量含む

第34図 SK131実測図 (1/30)



第35図 SK131出土遺物実測図 (1/3)

(4) 近世～近現代の遺構

SD008 (第36図)

1区の西側で検出した、南西から北東方向へ調査区を横断する溝である。全長は明らかにできないが、検出範囲で長さ9.0m以上、幅0.80～1.24m、深さ0.15～0.20m前後を測る。内部形状は両側が一段浅い皿状の掘り込みを呈し、中央に一段深い溝が掘り込まれる。埋土は5層に分けられ、1～3層は水田耕作土に由来する灰黄褐色粘質土、4・5層は地山層に由来すると思われる明黄褐色粘質土、灰白色粘質土である。1～3層には酸化鉄分、4・5層にはマンガンを含むことから、滞水状態にあったことが分かる。遺構の性格としては水田に伴う水路の可能性が考えられる。遺物は弥生土器、土師器、須恵器の他にガラス片が出土したが、いずれも細片のため図示できるものはない。この場所一帯が水田化したのは近世以降と考えられるため、開削時期は近世以降で、何度か改修や溝浚いのため掘り直されているのであろう。最終的な埋没時期は近現代である。

SK110 (第37図)

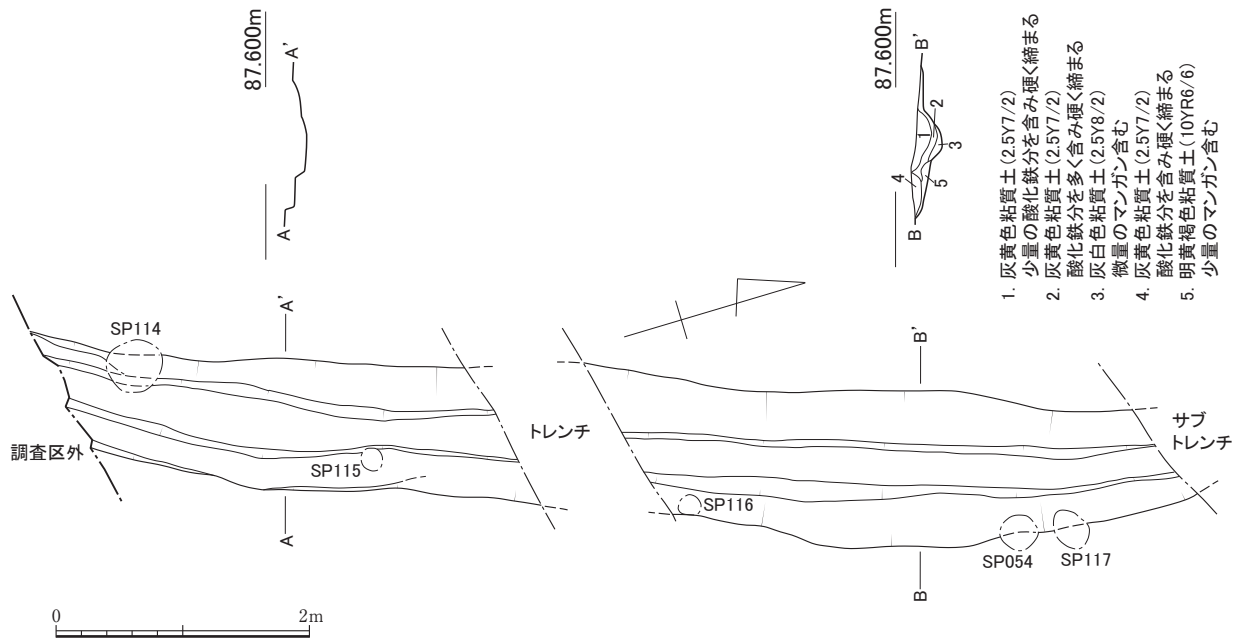
1区の東端部近くで検出した土坑である。平面形状は歪な隅丸長方形を呈し、長辺2.01m、短辺1.22m、深さ0.18mを測る。埋土は暗褐色砂質土で、上部に酸化鉄分の沈着が認められる。底面は比較的平であるが、東壁際の1箇所に土坑状の掘り込みを持つ。形状が不整形で掘り込みが浅いことと、この周囲の地山が礫質土であることから、必ずしも人為的な掘り込みではなく、地山礫層の部分的な窪みに土砂が堆積して生じたものである可能性もある。遺物は弥生土器、土師器、須恵器、東播系須恵器が出土しているが、コンクリート片も混じることから近現代の遺構である。

SK110出土遺物 (第38図)

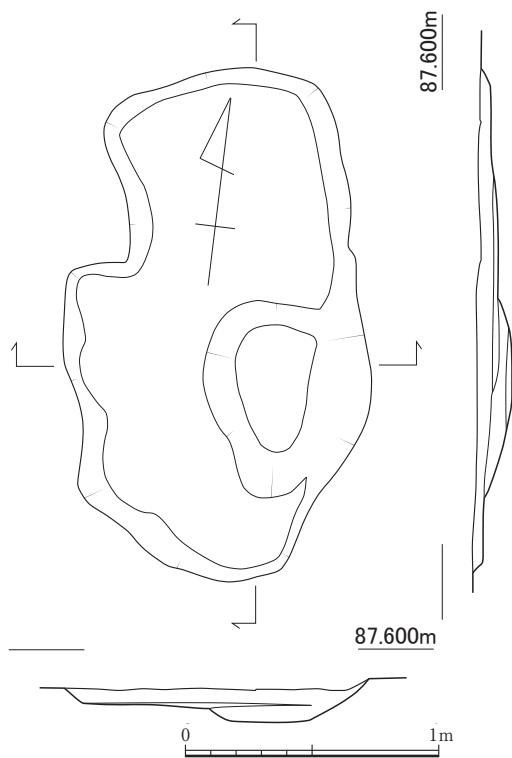
20・21は須恵器である。20は甕の頸部片で、外面にタタキ痕、内面に同心円状当具痕が残る。21は壺の底部で、復元底径12.0cmを測る。22は東播系須恵器捏鉢で、体部は外に開き、口縁部は肥厚する。

SK113 (第39図)

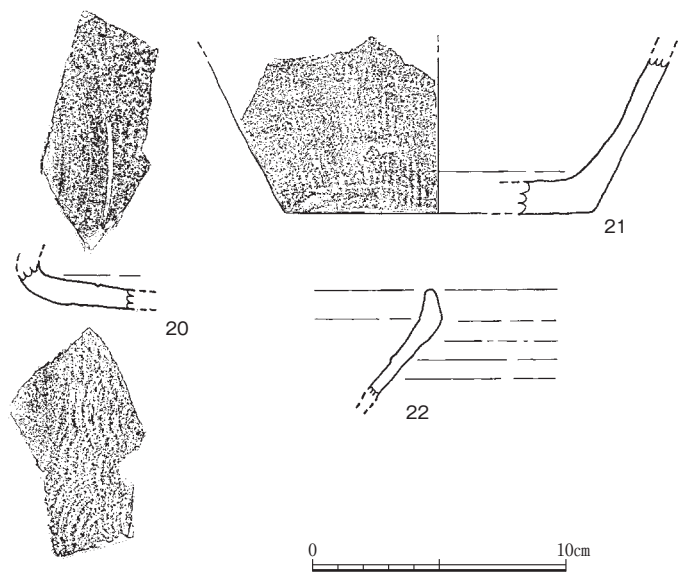
1区の東端部で検出した土坑である。東半部が調査区外に続くため全体の形状・規模は明らかにできないが、平面形状は楕円形状を呈し、長径1.24m以上、短径1.13m、深さ0.07mを測る。埋土は酸化鉄分の混じる暗褐色砂質土で、下層には灰黄褐色土が混じる。遺物は須恵器の他に土器の細片が出土しているが、図示できるものはない。埋土が前述のSK110と類似しており、SK110と同時期でかつ同じ要因で形成されたものである可能性が高く、近代以降に位置付ける。



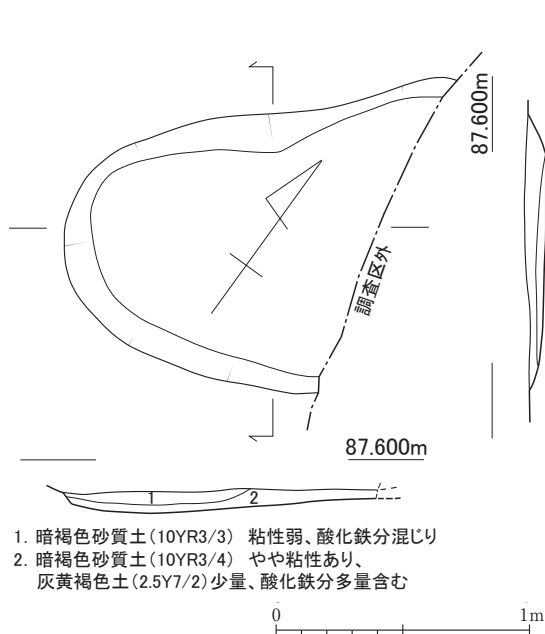
第36図 SD008実測図 (1/60)



第37図 SK110実測図 (1/30)

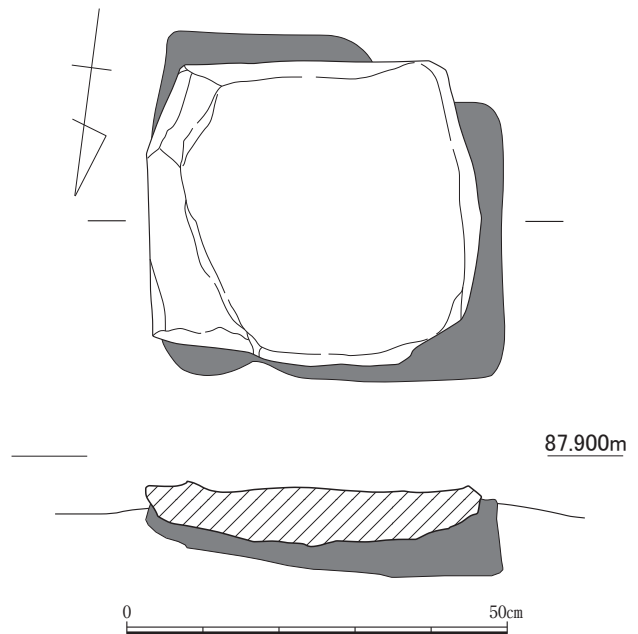


第38図 SK110出土遺物実測図 (1/3)



1. 暗褐色砂質土(10YR3/3) 粘性弱、酸化鉄分混じり
2. 暗褐色砂質土(10YR3/4) やや粘性あり、
灰黄褐色土(2.5Y7/2)少量、酸化鉄分多量含む

第39図 SK113実測図 (1/30)



第40図 SX122実測図 (1/10)

(5) 時期不明及びその他の遺構

SX122 (第40図)

2区で検出した礎石状遺構である。上部が平坦な安山岩の石材を検出したためその周囲を精査したが、掘り込みプランは確認されなかった。さらに周囲の地山を断ち割り、礎石下部の確認を行ったところ、礎石下部に硬く締まる明黄褐色土が認められた。この土は三和土と思われ、根締めのために充填したものであろう。礎石の規模は長辺0.46、短辺0.44m、厚さは最大で0.08mを測る。建物に伴う遺構であろうが、これに対応する礎石あるいは礎石抜き取り痕跡は確認されず、全体の構造は不明である。なお、遺物の出土はなく時期は不明であるが、旧宅地に伴うもので近代以降の可能性が高い。

SA1 (第41図)

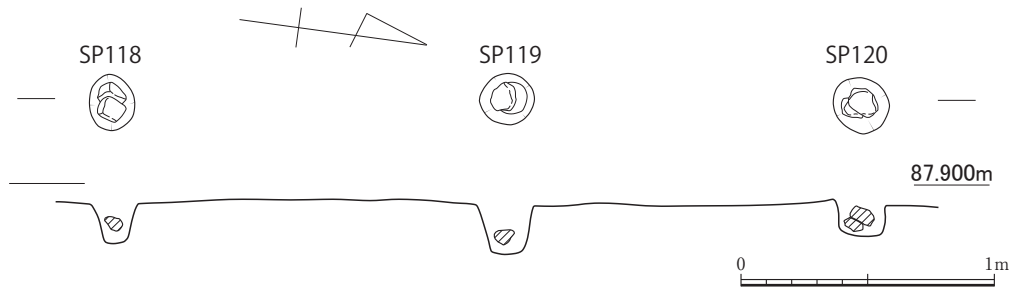
2区で検出した柱穴列である。SP118・SP119・SP120の3基のピットからなり、主軸はN-8°-Wとやや西に振る。直径0.19～0.24m、深さ0.14～0.15m、柱穴間の中心距離はSP118-SP119間が1.56m、SP119-SP120間は1.41mを測る。埋土はいずれも褐灰色粘質土である。3基ともに内部に礎盤石を据えており、うちSP118とSP120は根締めのためか2点の礫を入れている。従って本来は掘立柱建物を構成するものである可能性があるが、削平のためか対応する柱穴を確認できなかった。出土遺物はなく、遺構の時期は明らかにできない。

SK001 (第42図)

1区で検出した土坑である。平面形状は長楕円形状を呈し、長径1.39m、短径0.75m、深さ0.11mを測る。埋土は4層に分けられるが、堆積状況を見るに1～3層は掘り返しによって形成されたものであろう。遺構の上面には多量のマンガンの沈着が認められた。遺物は土器の細片が少量出土しているが、時期を判別できるものはない。

SK002 (第42図)

1区で検出した土坑である。平面形状は丸みのある逆台形状を呈し、長径1.23m、短径0.75m、深さ0.17mを測る。内部は東側にステップ状の段が付く。埋土は4層に分けられ、1層は灰黄色粘質土、2・3層は明黄褐色粘質土、4層はにぶい黄褐色粘質土である。遺物は弥生土器と思われる土器片が出土しているが、細片のため遺構の時期は明らかにできない。



第41図 SA1実測図 (1/30)

SK010 (第42図)

1区で検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形状を呈し、長径0.72m、短径0.58m、深さ0.30mを測る。埋土は上層が黒褐色土や灰黄色粘質土の混じる明黄褐色粘質土、下層が明黄褐色土や黒褐色土の混じる灰白色粘質土である。遺物は弥生土器が出土しているが、細片のため図示できるものはない。弥生時代の遺構の可能性があるが、遺物の出土に乏しく決め手を欠く。

SK047 (第42図)

1区で検出した土坑である。SK007と重複しており、SK007によって切られている。平面形状は楕円形状を呈すると思われる、長径0.62m、短径0.58m以上、深さ0.13mを測る。埋土は灰黄褐色土混じりの明黄褐色土で、上部にマンガンの沈着が認められる。遺物は土器の細片が少量出土しているが、時期を判別できるものはない。しかしSK007が古墳時代初頭であることから、それ以前の構築である。

SK081 (第42図)

1区で検出した土坑である。平面形状はやや歪な円形を呈し、長径0.50m、短径0.44m、深さ0.16mを測る。埋土は4層あり、上層の1～3層と下層の4層に分けられる。下層には地山の明黄褐色粘質土が多量に混じる。遺物は弥生土器が出土しているが、細片のため遺構の時期は明らかにできない。

SK088 (第42図)

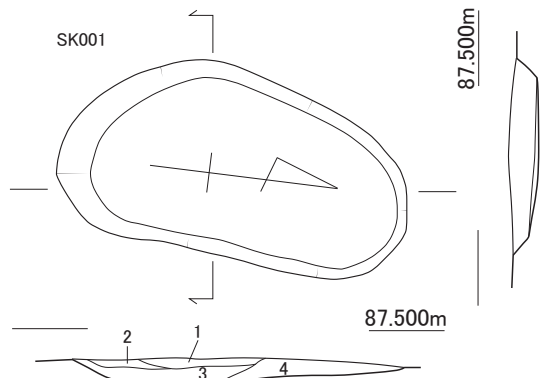
1区で検出した土坑である。平面形状は略円形を呈し、長径0.54m、短径0.50m、深さ0.12mを測る。内部は全体に浅い皿状の掘り込みをなし、中央に小ピット状の掘り込みを持つ。埋土は少量の明黄褐色土が混じる灰黄褐色土である。遺物の出土はなく、遺構の時期は明らかにできない。

SK101 (第42図)

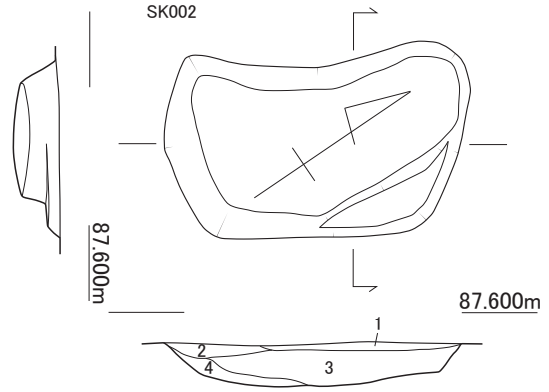
1区で検出した土坑である。複数の遺構と重複しており、SP066・SP102・SK103にそれぞれ切られる。平面形状は楕円形状を呈し、長径0.91m、短径0.62m、深さ0.11mを測る。埋土はにぶい黄褐色土で、少量のマンガンを含む。遺物の出土がなく、詳細な時期は明らかにできないが、SP102が弥生時代後期であることから、切り合い関係からそれ以前に位置付けられる。

SK124 (第43図)

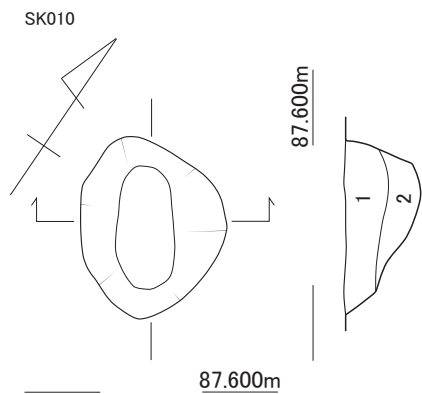
2区で検出した土坑である。平面形状は円形を呈し、長径0.77m、短径0.60m、深さ0.30mを測る。埋土は2層ともに褐灰色粘質土で1層には明黄褐色土を多量に含む。2層は砂質土層で粘性に乏しい。遺物の出土がなく、遺構の時期は明らかにできないが、埋土が後述のSK127に類似することから近代以降のものである可能性が高い。



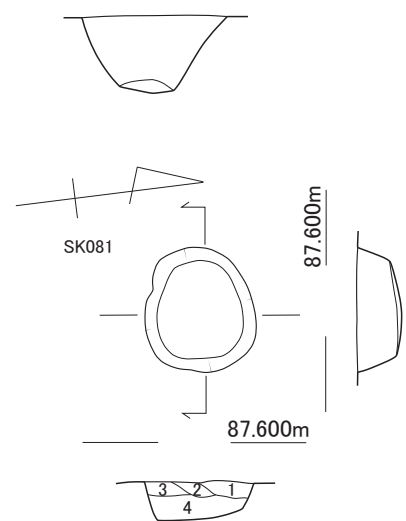
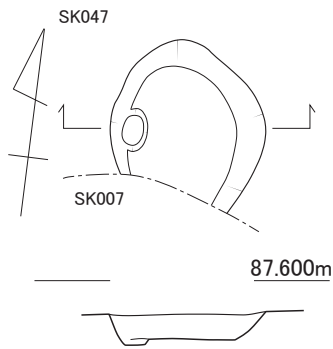
1. 黒褐色粘質土(10YR3/2) マンガン・酸化鉄分多量混じる
2. 灰黄色粘質土(2.5Y6/2) 酸化鉄分混じり
3. 灰黄色粘質土(2.5Y6/2) 酸化鉄分少量混じる
4. 黄灰色粘質土(2.5Y5/1) 酸化鉄分混じり



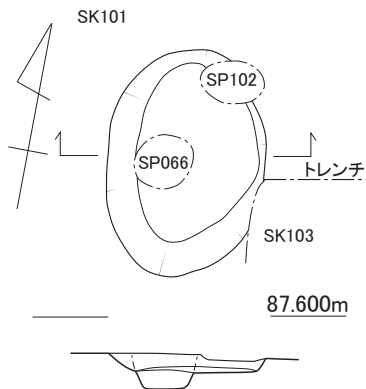
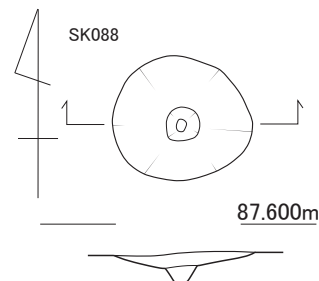
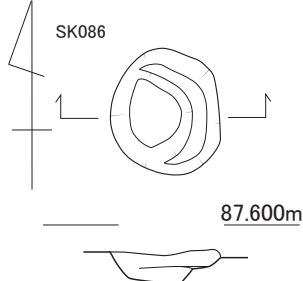
1. 灰黄色粘質土(2.5Y6/2) マンガン・酸化鉄分多量含む
2. 明黄褐色粘質土(10YR6/6) 酸化鉄分少量含む
3. 明黄褐色粘質土(10YR6/6) 酸化鉄分少量、灰黄色砂質土微量含む
4. にぶい黄褐色粘質土(10YR7/4) 酸化鉄分少量含む



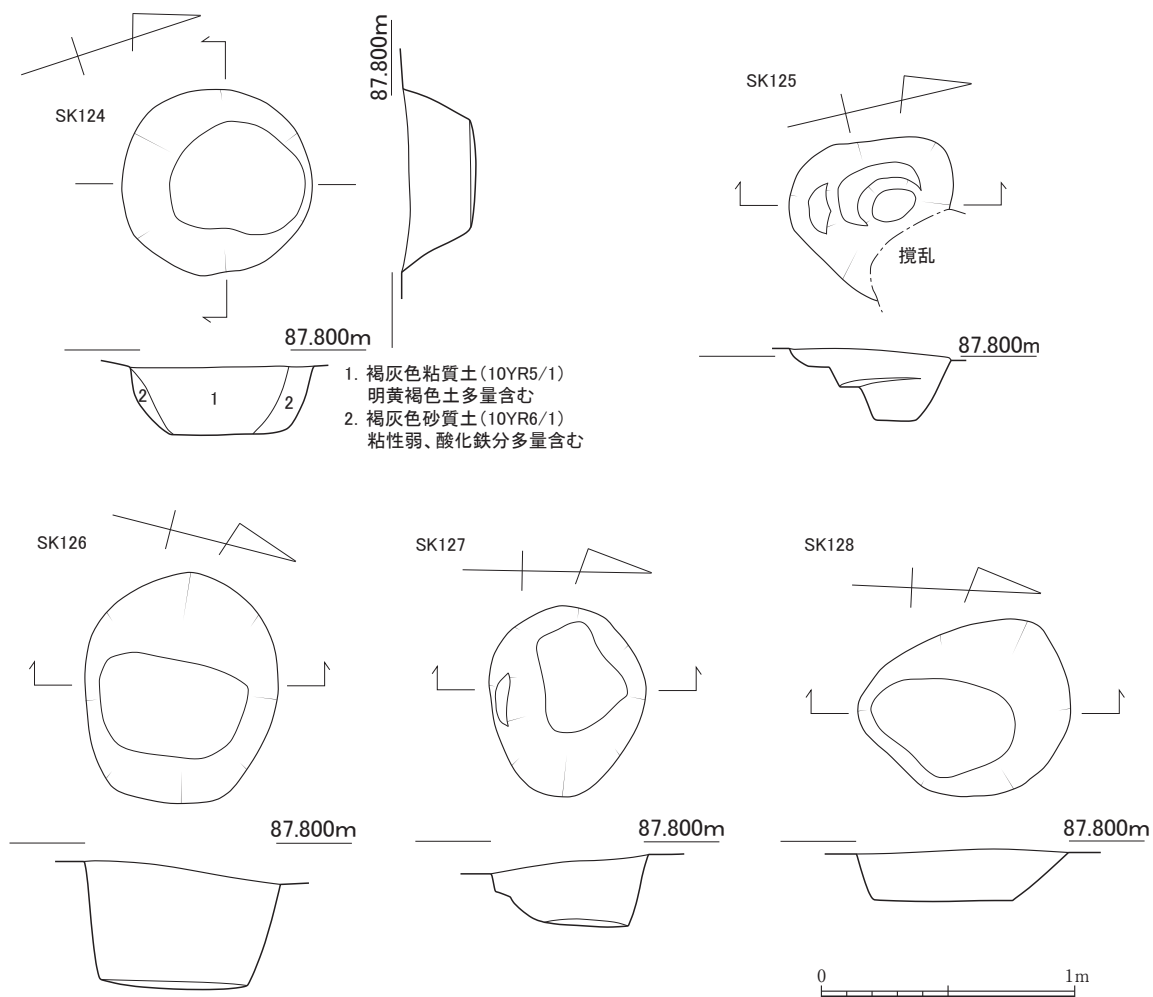
1. 明黄褐色粘質土(10YR6/6)・黒褐色土(10YR3/2)・灰黄色粘質土(2.5Y7/2)混じり
2. 灰白色粘質土(2.5Y8/2)少量の明黄褐色土(10YR6/6)・黒褐色土(10YR3/2)混じり



1. 暗褐色粘質土(10YR3/3) 明黄褐色粘質土混じり
2. 明黄褐色粘質土(10YR6/6) 暗褐色粘質土微量混じる
3. 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) 明黄褐色粘質土混じり
4. 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) 明黄褐色粘質土多量混じる



第42図 その他の遺構実測図① (1/30)



第43図 その他の遺構実測図② (1/30)

SK125 (第43図)

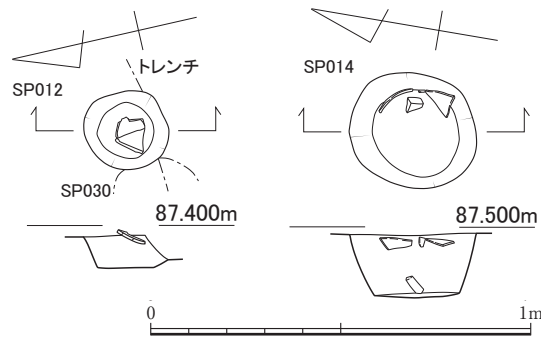
2区で検出した土坑である。一端を攪乱で切られるが、平面形状は丸みのある三角形状を呈し、長径0.68m、短径0.63m以上、深さ0.28mを測る。内部は南から北側にかけて階段状の段が付く。埋土は褐灰色粘質土で、酸化鉄分を多量に含む。遺物は土器細片がわずかに出土したが、遺構の時期を特定できるものはない。埋土が後述のSK127に類似する点を勘案すると、近代以降のものである可能性が高い。

SK126 (第43図)

2区で検出した土坑である。平面形状は楕円形状を呈し、長径0.85m、短径0.83m、深さ0.52mを測る。埋土は明黄褐色粘土混じりの褐灰色粘質土で、拳大～人頭大の礫を含む。遺物の出土はなく、遺構の時期は明らかにできないが、埋土が後述のSK127に類似することから近代以降のものである可能性が高い。

SK127 (第43図)

2区で検出した土坑である。平面形状は卵形を呈し、長径0.81m、短径0.60m、深さ0.26mを測る。内部は南壁際に小さい段が付く。埋土は明黄褐色粘土混じりの褐灰色粘質土で、少量の礫を含む。遺物は弥生土器が出土しているが、他に燻し瓦も出土しており、近代以降のものである可能性が高い。



第44図 その他の遺構実測図③ (1/20)

SK128 (第43図)

2区で検出した土坑である。平面形状はやや歪な卵形を呈し、長径0.85m、短径0.61m、深さ0.20mを測る。埋土は褐灰色粘質土で酸化鉄分と礫を多量に含む。遺物の出土はなく遺構の時期は明らかにできないが、埋土がSK127に類似することから近代以降のものである可能性が高い。

SP012 (第44図)

1区で検出したピットである。SP030と重複しており、SP012がSP030を切っている。また、南側は試掘調査トレンチによって上部を削られている。平面形状は円形を呈し、長径0.22m、短径0.19m以上、深さ0.08mを測る。埋土は明黄褐色粘質土で、多量のマンガンが沈着する。遺物は検出面から弥生土器片が出土しているが、遺構の時期判定の決め手を欠く。

SP014 (第44図)

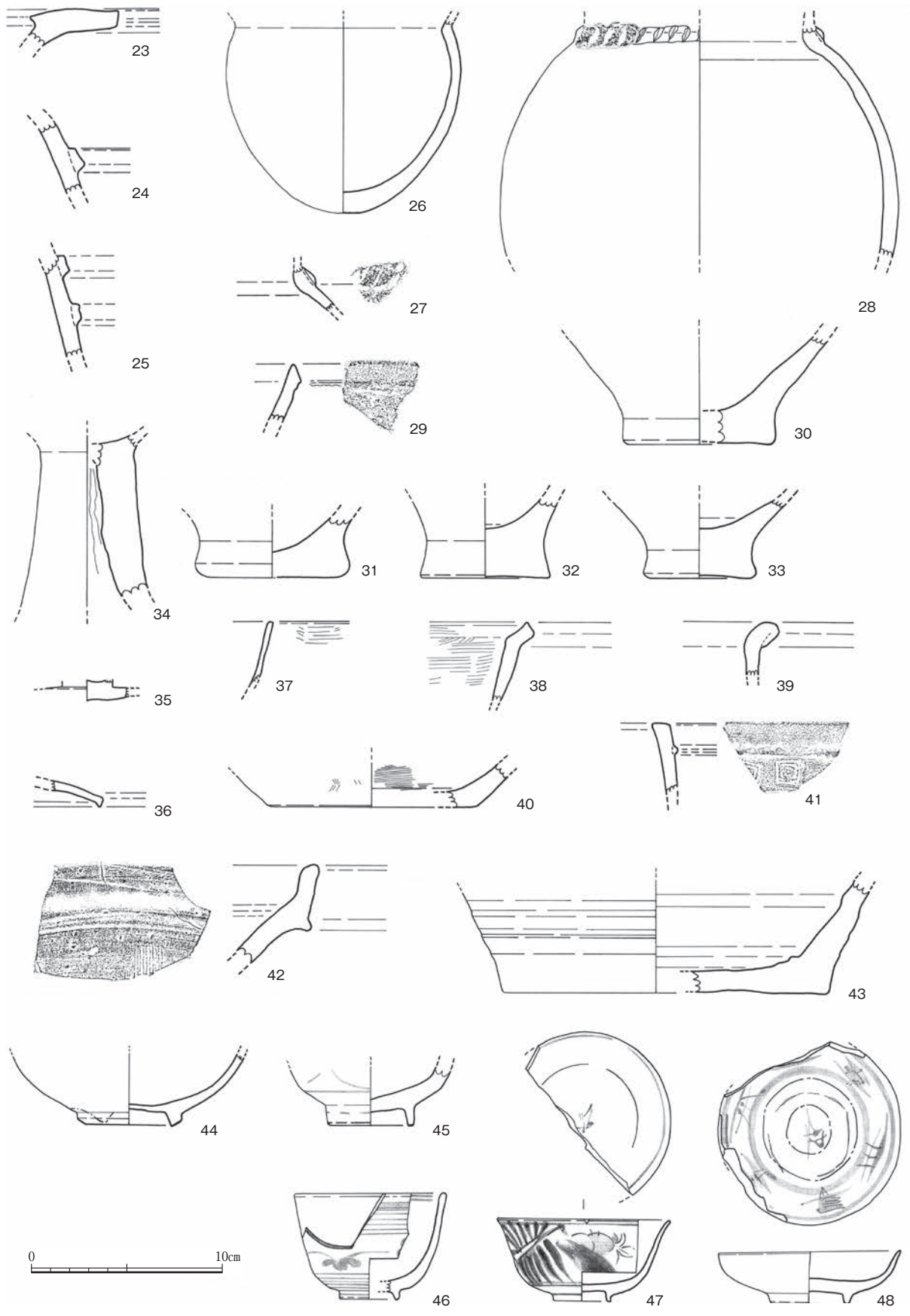
1区で検出したピットである。平面形状は円形状を呈し、長径0.37m、短径0.32m、深さ0.17mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土で黄色風化礫を含み、多量のマンガンの沈着が認められる。遺物は東半部の壁際から弥生土器と思われる土器片が出土しているが、細片のため図示できるものはない。SP013やSK015、SK036のように土器を埋置した遺構である可能性もあり、弥生時代に帰属する遺構の可能性もある。

(6) 調査区出土遺物 (第45～47図)

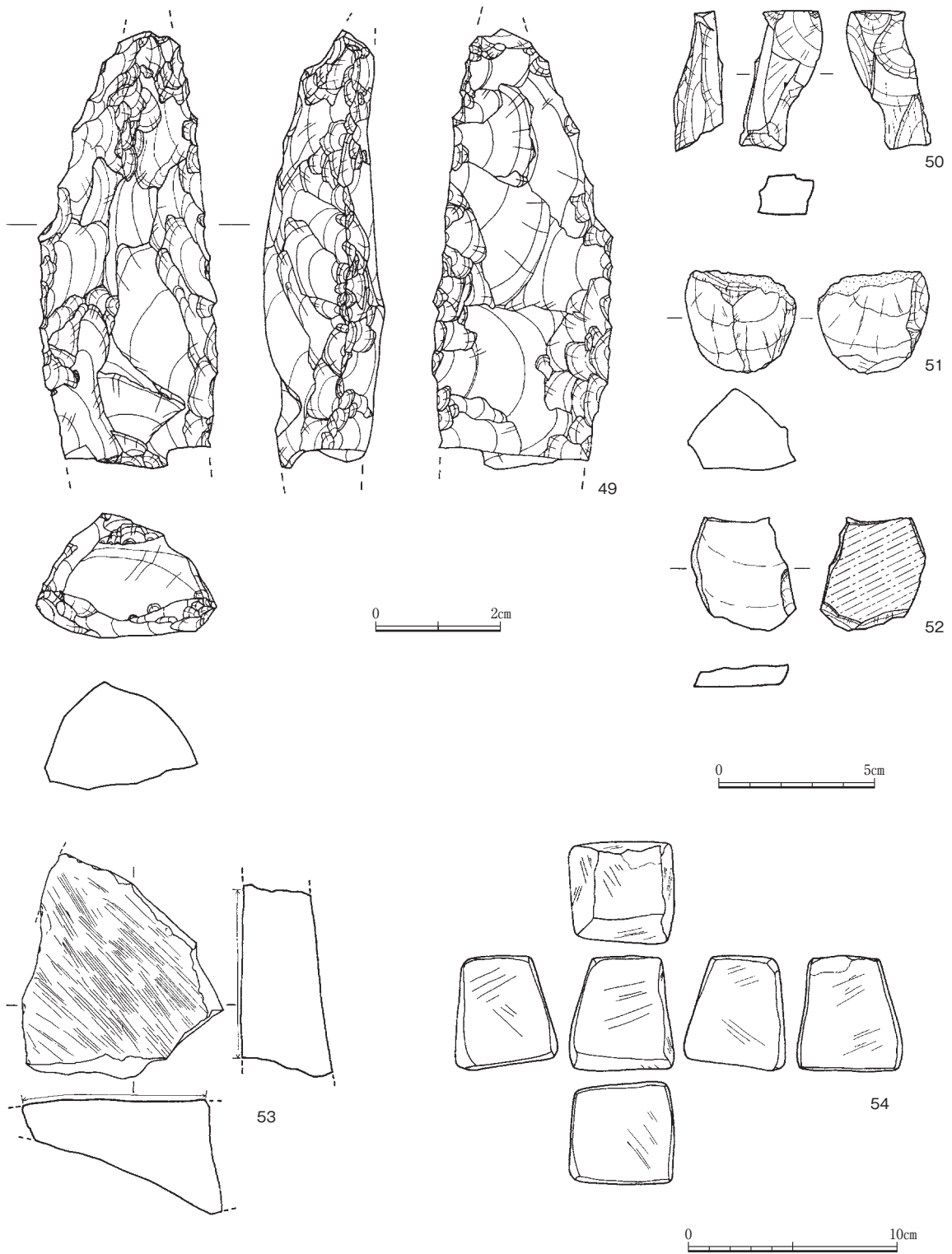
重機による表土掘削及び遺構検出作業時に出土した遺物を第45～47図に示した。第45図は土器・陶磁器類である。23～34は弥生土器で、23は鋤先口縁の壺、24・25は胴部に断面台形状の凸帯を数条巡らせる壺である。これらは中期後半に比定される。26は鉢で底部は丸底を呈する。27・28は頸部に刻目凸帯を巡らせる壺である。これらは後期後半～末頃に位置付けられる。29は鉢であろうか。30～33は甕ないし壺の底部で、いずれも中期後半に位置付けられよう。34は高坏で坏部と脚裾部を欠失する。35・36は須恵器の坏蓋である。35は低平化した宝珠摘みを持つ。37は瓦器碗で、口縁部外面に粗いヘラミガキを施す。38は土師器の鍋である。39は土師器の鉢で、口縁部が外反し端部を折り返して玉縁状に肥厚する。40・41は瓦質土器である。40は鉢の底部、41は火鉢で、凸部下に雷文スタンプを施す。42は備前焼の摺鉢で、内面に8条1単位の摺目を施す。43は備前焼の甕である。44は京焼風陶器碗、45は陶胎染付碗である。46は染付磁器碗で、破損面に黒色の付着物が付くことら漆継等による補修を施したものであろう。47は赤絵磁器の端反碗である。48は染付磁器皿で、見込に蛇の目釉剥ぎを施す。以上の内、26・38・42・45は1区の表土掘削時、23～25・27～37・40・41は1区遺構検出時、43・44・46～48は2区の表土掘削時、39は2区遺構検出時の出土である。

第46図は石器及び石製品である。49は腰岳産と推定される黒曜石製の三稜尖頭器で、先端及び基部を折損する。50は流紋岩の石核で、表面は全体的に風化している。これらは後期旧石器時代の所産である。51・52はチャートないし鉄石英を素材とするもので、51は石核、52は剥片である。山香町で産出する火打石の石材として知られる六太郎角に似るが、稜に微細な打ち欠き痕跡は見られず火打石ではない。年代は不明だが、旧石器時代の遺物の可能性がある。53は石皿の破片で上面に摺痕が残る。54は砥石で各面に使用痕が残る。これらはいずれも1区で、52・53は表土掘削時、49～51・54は遺構検出時に出土した。

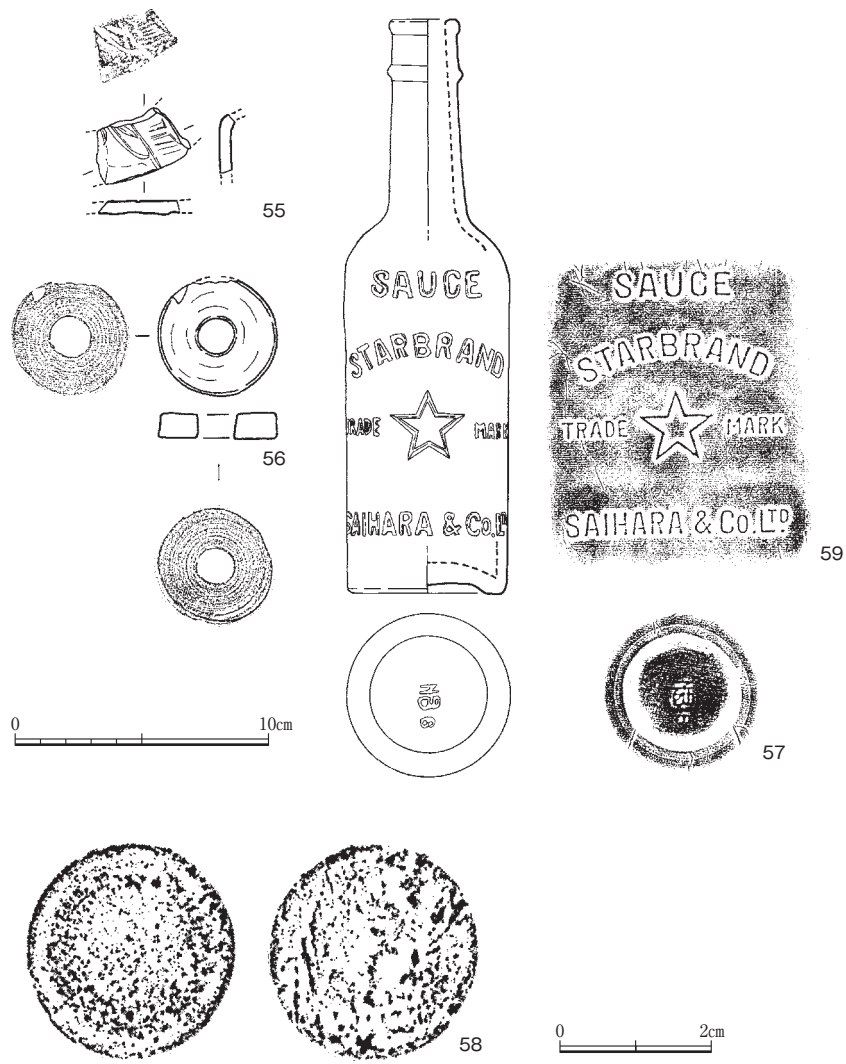
第47図は土製品・ガラス製品・金属製品である。55は型押し整形の土人形の破片であるが、何を模したものかは明らかにできない。胎土には滑石粉を混入する。56は磁器製の戸車である。周縁は使用により平滑になっている。57は淡緑色を呈するガラス製のソース瓶で、外面に「SAUCE／STARBRAND／TRADE ☆ MARK／SAIHARA&Co.LTD」の陽刻（エンボス）、底面には製瓶メーカーを示す記号（NB？）と数字（6）を陽刻する。サイズから2合瓶である。58は一銭銅貨であるが、錆及び付着物により文字や銭文はほとんど判読できない。実測図を示していないが、写真図版8の59は鉄滓である。これらのうち、57は1区表土掘削時、59は1区遺構検出時、55・56・58は2区表土掘削時に出土した。



第45図 調査区出土遺物実測図① (1/3)



第46図 調査区出土遺物実測図② (1/1・1/2・1/3)



第47図 調査区出土遺物実測図③ (1/3・1/1)

第2表 恒道原田遺跡遺構一覧表

遺構番号	遺構種別	調査区域	検出標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SK001	土坑	1区	87.377	1.39	0.75	0.11	個別図参照				土器片	
SK002	土坑	1区	87.482	1.23	0.75	0.17	個別図参照				弥生土器?	
SP003	ピット	1区	87.355	0.41	(0.26)	0.20	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	弥生土器?	SK004に切られる
SK004	土坑	1区	87.361	0.58	(0.45)	0.16	個別図参照				須恵器、土師器、石鏃	SP003を切り、SP031に切られる
SP005	ピット	1区	87.450	0.31	0.24	0.09	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	弥生土器、土器片	
SP006	ピット	1区	87.459	0.29	0.28	0.14	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	土器片	
SK007	土坑	1区	87.486	1.02	0.39	0.20	にぶい黄褐色土	10YR5/3	◎	上部にマンガン	弥生土器、土師器	SK047を切る
SD008	溝	1区	87.446	(9.00)	1.24	0.21	個別図参照				弥生土器、土師器、須恵器、ガラス	
SK009	土坑	1区	87.495	0.56	0.41	0.10	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	土器片	
SK010	土坑	1区	87.484	0.72	0.58	0.30	個別図参照				弥生土器	
SK011	土坑	1区	87.497	0.76	0.73	0.22	個別図参照				須恵器、瓦器、土器片	SK087を切る
SP012	ピット	1区	87.374	0.22	(0.19)	0.08	明黄褐色土	10YR6/6	○	多量のマンガン	弥生土器	SP030を切る
SP013	ピット	1区	87.464	0.29	0.28	0.17	褐色土	10YR4/4	○	少量のマンガン・黄色風化礫	弥生土器	
SP014	ピット	1区	87.486	0.37	0.32	0.17	にぶい黄褐色土	10YR5/4	◎	黄色風化礫、多量のマンガン	弥生土器?	
SK015	土坑	1区	87.463	0.61	(0.38)	0.12	にぶい黄褐色土	10YR4/3	◎	少量のマンガン	弥生土器、土器片	SP083に切られる
SP016	ピット	1区	87.468	0.29	0.29	0.11	褐色土	10YR4/6	◎	酸化鉄分、上部にマンガン	土師器、土器片	
SX017	落込み	1区	87.347	(1.30)	(0.58)	0.04	にぶい黄褐色土	10YR5/3	◎	マンガン、酸化鉄分	白磁	
SP018	ピット	1区	87.368	0.24	(0.16)	0.11	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP019	ピット	1区	87.368	0.38	0.33	0.12	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	土器片	
SP020	ピット	1区	87.362	0.25	0.25	0.08	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土	土器片	SP021に切られる
SP021	ピット	1区	87.359	0.27	0.24	0.10	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		SP020を切る
SP022	ピット	1区	87.342	0.46	0.37	0.08	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	土器片	SP023を切る
SP023	ピット	1区	87.342	0.32	(0.28)	0.08	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		SP022に切られる
SP024	ピット	1区	87.330	(0.34)	(0.27)	0.09	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	弥生土器?	SP022を切る
SP025	ピット	1区	87.379	0.25	0.17	0.05	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP026	ピット	1区	87.390	0.23	0.17	0.05	にぶい黄褐色土	10YR5/3	◎	上部にマンガン		
SP027	ピット	1区	87.393	0.44	0.33	0.15	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP028	ピット	1区	87.396	0.31	0.28	0.07	褐色土	7.5YR4/4	◎	上部に酸化鉄分		
SP029	ピット	1区	87.398	0.19	0.17	0.08	褐色土	7.5YR4/4	◎	上部に酸化鉄分		
SP030	ピット	1区	87.372	0.28	(0.25)	0.12	灰黄褐色土	2.5Y6/2	○	多量のマンガン、少量の明黄褐色土		SP012に切られる
SP031	ピット	1区	87.361	0.36	0.29	0.12	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		SK004を切る
SD032	溝	1区	87.372	1.24	0.24	0.07	にぶい黄褐色土	10YR5/3	◎	酸化鉄分		耕作痕か
SK033	土坑	1区	87.373	0.66	(0.50)	0.07	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP034	ピット	1区	87.372	0.24	0.19	0.07	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	弥生土器	
SP035	ピット	1区	87.366	0.33	(0.20)	0.25	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SK036	土坑	1区	87.393	0.66	0.42	0.12	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	弥生土器、土器片	
SP037	ピット	1区	87.391	0.26	0.23	0.20	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP038	ピット	1区	87.432	0.34	0.29	0.08	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		

遺構番号	遺構種別	調査区域	検出標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SP039	ピット	1区	87.449	0.24	0.18	0.11	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP040	ピット	1区	87.451	0.24	0.17	0.01	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP041	ピット	1区	87.450	0.27	0.20	0.11	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP042	ピット	1区	87.456	0.27	0.23	0.06	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	土器片	
SP043	ピット	1区	87.481	0.34	(0.20)	0.05	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP044	ピット	1区	87.475	0.21	0.20	0.08	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP045	ピット	1区	87.451	0.28	0.22	0.07	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP046	ピット	1区	87.488	0.39	0.32	0.25	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	土器片	
SK047	土坑	1区	87.477	0.62	(0.58)	0.13	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	土器片	SK007 に切られる
SK048	土坑	1区	87.491	0.63	0.51	0.11	褐色土	10YR4/6	◎	灰黄褐色土・マンガンが斑状に混じる	土器片	
SP049	ピット	1区	87.491	0.30	0.23	0.06	黒褐色土	7.5YR3/2	○	褐色土、マンガン		
SP050	ピット	1区	87.445	0.48	0.48	0.09	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP051	ピット	1区	87.461	0.50	0.34	0.10	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP052	ピット	1区	87.462	0.43	0.32	0.10	灰黄褐色土	10YR4/2	◎	黄色風化礫、上部に多量のマンガン		
SP053	ピット	1区	87.459	0.26	0.22	0.22	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP054	掘立柱建物(SB1)	1区	87.432	(0.29)	(0.28)	0.10	にぶい黄褐色土	10YR4/3	○	少量の黄色風化礫、上部に多量のマンガン		SD008 に切られる
SP055	ピット	1区	87.444	0.16	0.16	0.29	灰黄褐色土	10YR4/2	○	少量の黄色風化礫・マンガン	土器片	
SP056	掘立柱建物(SB1)	1区	87.466	0.42	0.34	0.08	褐灰色土	10YR5/1	◎	酸化鉄分、上部に少量のマンガン		
SP057	掘立柱建物(SB1)	1区	87.479	0.38	0.33	0.20	にぶい黄褐色土	10YR5/4	◎	少量のマンガン	土器片	
SP058	掘立柱建物(SB1)	1区	87.492	0.36	0.33	0.12	個別図参照					
SP059	掘立柱建物(SB1)	1区	87.497	0.35	0.35	0.03	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP060	掘立柱建物(SB1)	1区	87.489	0.52	0.38	0.05	にぶい黄褐色土	10YR5/4	○	上部に少量のマンガン		SK087 に切られる
SP061	掘立柱建物(SB1)	1区	87.499	0.47	0.37	0.19	個別図参照					土師器、須恵器、土器片
SK062	土坑	1区	87.457	0.52	0.40	0.13	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP063	ピット	1区	87.474	0.33	0.23	0.07	黄褐色土	10YR5/6	○	上部にマンガン		
SP064	掘立柱建物(SB1)	1区	87.469	0.26	0.21	0.04	にぶい黄褐色土	10YR4/3	○	少量の黄色風化礫・マンガン		
SP065	掘立柱建物(SB1)	1区	87.486	0.22	0.17	0.13	褐色土	10YR4/6	○	少量の黄色風化礫、上部に少量のマンガン	弥生土器?	
SP066	ピット	1区	87.457	0.24	0.21	0.14	にぶい黄褐色土	10YR5/3	◎	淡黄白色土、微量のマンガン	弥生土器?	SK101 を切る
SK067	土坑	1区	87.462	0.58	0.37	0.19	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP068	ピット	1区	87.493	0.29	0.28	0.08	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP069	ピット	1区	87.481	0.30	0.29	0.21	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SK070	土坑	1区	87.457	0.57	0.40	0.18	個別図参照					土師器
SP071	掘立柱建物(SB1)	1区	87.445	0.36	0.28	0.10	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP072	ピット	1区	87.462	0.28	0.25	0.09	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP073	ピット	1区	87.478	0.31	0.30	0.05	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP074	ピット	1区	87.478	0.34	0.30	0.19	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP075	ピット	1区	87.478	0.34	0.25	0.17	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP076	ピット	1区	87.467	0.18	0.18	0.15	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP077	ピット	1区	87.463	0.23	0.20	0.05	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	土器片	

遺構番号	遺構種別	調査区域	検出標高(m)	長辺(m)	短辺(m)	深さ(m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SP078	掘立柱建物(SB1)	1区	87.471	0.45	0.30	0.09	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP079	ピット	1区	87.478	0.31	0.27	0.09	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP080	ピット	1区	87.473	0.38	0.23	0.08	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	土器片	
SK081	土坑	1区	87.477	0.50	0.44	0.16	個別図参照			弥生土器?		
SP082	ピット	1区	87.483	0.45	0.29	0.10	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	土器片	
SP083	ピット	1区	87.474	0.33	0.24	0.09	褐色土	10YR4/6	◎	少量のマンガン・酸化鉄分	弥生土器?	
SP084	ピット	1区	87.494	0.34	0.28	0.12	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		SK015を切る
SP085	ピット	1区	87.491	0.48	0.20	0.08	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SK086	土坑	1区	87.498	0.51	0.45	0.12	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土	土器片	
SK087	土坑	1区	87.492	(0.93)	0.63	0.09	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	須恵器	SP060を切り、SK011に切られる
SK088	土坑	1区	87.490	0.54	0.50	0.12	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP089	ピット	1区	87.487	0.35	0.24	0.08	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP090	ピット	1区	87.506	0.16	0.14	0.04	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP091	ピット	1区	87.496	0.26	0.20	0.13	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SP092	ピット	1区	87.500	0.44	0.40	0.06	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	弥生土器、土器片	SP093を切る
SP093	ピット	1区	87.510	0.39	(0.31)	0.03	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		SP092に切られる
SK094	土坑	1区	87.509	0.57	0.53	0.03	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP095	ピット	1区	87.507	0.31	0.28	0.06	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		
SK096	土坑	1区	87.501	0.53	0.42	0.05	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP097	ピット	1区	87.504	0.29	0.27	0.05	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP098	ピット	1区	87.493	0.21	0.18	0.03	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP099	ピット	1区	87.493	0.20	0.19	0.03	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP100	ピット	1区	87.504	0.33	0.30	0.04	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SK101	土坑	1区	87.499	0.91	0.62	0.11	にぶい黄褐色土	10YR5/4	○	少量のマンガン		SK103・SP066・SP102に切られる
SP102	ピット	1区	87.467	0.25	0.17	0.04	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	弥生土器、須恵器	
SK103	土坑	1区	87.499	0.86	(0.71)	0.04	黄褐色土	10YR5/6	○	灰色粘土塊、上部にマンガン		埋土から新しい時期の遺構か?
SP104	掘立柱建物(SB1)	1区	87.431	0.34	0.24	0.15	にぶい黄褐色土	10YR5/3	○	マンガン、酸化鉄分	土器片	
SP105	ピット	1区	87.427	0.30	0.23	0.03	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP106	ピット	1区	87.484	0.24	(0.18)	0.07	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン	弥生土器、土器片	
SP107	ピット	1区	87.481	0.31	0.29	0.05	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SP108	ピット	1区	87.478	0.26	0.21	0.06	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
S109	ピット	1区	87.483	(0.29)	0.18	0.05	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		
SK110	土坑	1区	87.484	2.01	1.22	0.18	暗褐色砂質土	7.5YR3/3	○	上部に酸化鉄分	弥生土器、土師器、須恵器、東播系須恵器	コンクリート片混じる
SK111	土坑	1区	87.537	(0.96)	0.73	0.20	暗褐色砂質土	7.5YR3/3	○	黄色風化礫、黄灰色粘土塊	弥生土器、土師器	
SK112	土坑	1区	87.479	1.90	1.06	0.14	灰褐色土	7.5YR4/2	◎	少量のマンガン・酸化鉄分	弥生土器、土師器	
SK113	土坑	1区	87.460	(1.24)	1.13	0.07	暗褐色砂質土	7.5YR3/3	○	上部に酸化鉄分	須恵器、土器片	
SP114	ピット	1区	87.391	(0.44)	(0.41)	0.17	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		SD008に切られる
SP115	ピット	1区	87.362	(0.19)	(0.17)	0.10	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		SD008に切られる
SP116	ピット	1区	87.406	(0.18)	(0.17)	0.05	灰黄色土	2.5Y7/2	○	少量の明黄褐色土		SD008に切られる

遺構 番号	遺構 種別	調査 区域	検出標高 (m)	長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)	遺構埋土	土色記号	粘性	混入物	出土遺物	備考
SP117	ピット	1区	87.429	(0.34)	0.30	0.10	明黄褐色土	2.5Y6/6	○	灰黄色土、上部にマンガン		SD008に切られる
SP118	柱穴列 (SA1)	2区	87.834	0.20	0.19	0.14	褐灰色粘質土	10YR5/1	○	少量の酸化鉄分		礎盤石あり
SP119	柱穴列 (SA1)	2区	87.824	0.22	0.20	0.15	褐灰色粘質土	10YR5/1	○	少量の酸化鉄分		礎盤石あり
SP120	柱穴列 (SA1)	2区	87.830	0.27	0.24	0.14	褐灰色粘質土	10YR5/1	○	少量の酸化鉄分		礎盤石あり
SP121	ピット	2区	87.830	0.33	0.33	0.04	褐灰色粘質土	10YR5/1	◎	酸化鉄分		
SX122	礎石	2区	87.867	0.46	0.44	—	—	—	—	—		礎石下に三和土
SK123	土坑	2区	87.824	0.54	0.39	0.16	褐灰色粘質土	10YR5/1	◎	酸化鉄分		
SK124	土坑	2区	87.791	0.77	0.60	0.30	個別図参照					
SK125	土坑	2区	87.830	0.68	(0.63)	0.28	褐灰色粘質土	10YR5/1	◎	多量の酸化鉄分	土器片	
SK126	土坑	2区	87.734	0.85	0.83	0.52	褐灰色粘質土	10YR5/1	◎	明黄褐色粘土 (10YR6/6)、拳～人頭大の礫		
SK127	土坑	2区	87.748	0.81	0.60	0.26	褐灰色粘質土	10YR5/1	○	明黄褐色粘土 (10YR6/6)、微量の礫	弥生土器、瓦	
SK128	土坑	2区	87.762	0.85	0.61	0.20	褐灰色粘質土	10YR5/1	○	酸化鉄分、多量の礫		
SP129	ピット	2区	87.618	0.21	0.19	0.08	褐灰色粘質土	10YR5/1	◎	酸化鉄分		
SP130	ピット	2区	87.594	0.28	0.18	0.09	褐灰色粘質土	10YR5/1	◎	酸化鉄分		
SK131	土坑	2区	87.566	0.83	0.60	0.21	個別図参照					瓦質土器、土器片

※遺構寸法のうち、遺構の重複やトレンチ、部分的な検出等により全体の規模を示せないものは () で示した。

※粘性の記号は次のとおりとする (◎：強い、○：やや粘性あり、△：弱い)

第3表 恒道原田遺跡遺物観察表（土器・陶磁器）

挿図番号	器種	出土地点	法量 (cm)		器面調整		色調 (外面/内面)	備考	
			直径	器高	外面	内面			
第3図	1 染付磁器 碗	H30試掘7トレンチ	底径 3.9	(3.8)	施釉、畳付に離れ砂	施釉	灰白色/灰白色	肥前系	
	2 染付磁器 皿	H30試掘8トレンチ	口径 (11.8) 底径 3.7	2.2	施釉	施釉、見込蛇の目釉剥ぎ	灰白色/灰白色	肥前系	
第9図	3 弥生土器 甕	1区 SP005	口径 (12.2)	(4.6)	摩滅	摩滅	暗黄褐色/白黄褐色		
第11図	4 弥生土器 壺	1区 SK007	底径 2.4	(4.7)	ナデ	摩滅	淡褐色/灰褐色		
第13図	5 弥生土器 壺	1区 SP013	胴部径	(14.5)	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色/褐灰色		
第15図	6 弥生土器 甕	1区 SK015		(10.9)	摩滅	摩滅	淡褐色/黒灰褐色		
第17図	7 弥生土器 壺	1区 SK036	口径 (18.6)	(20.7)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・指頭圧痕	橙色/にぶい褐色		
	8 弥生土器 壺	1区 SK036		(8.7)	摩滅	摩滅	淡赤褐色/暗灰褐色		
第19図	9 弥生土器 甕	1区 SP106		(4.4)	タタキ	摩滅	橙色/橙色		
第21図	10 土師器 甕	1区 SB1 (SP061)		(3.2)	摩滅	摩滅	淡赤褐色/淡赤褐色		
	11 須恵器 甕	1区 SB1 (SP061)		(6.4)	タタキ後カキ目	同心円当具痕	灰褐色/灰褐色		
第25図	13 土師器 甕	1区 SP016		(12.8)	タテハケ	ヘラケズリ、指頭圧痕	暗黄褐色/淡茶褐色	把手欠損	
第27図	14 土師器 甕	1区 SK070		(2.3)	摩滅	摩滅	浅黄褐色/浅黄褐色		
第29図	15 須恵器 甕	1区 SK087		(9.9)	タタキ後カキ目	同心円当具痕	浅黄色/黄灰色		
第31図	16 須恵器 甕	1区 SP102		(5.2)	タタキ後カキ目	同心円当具痕	浅黄色/黄灰色		
第33図	17 須恵器 坏蓋	1区 SK011		(1.2)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色/灰白色	ヘラ記号状の刻線あり	
	18 瓦器 椀	1区 SK011		(2.6)	摩滅	摩滅	白灰色～暗褐色/白灰色～黄褐色		
第35図	19 瓦質土器 鍋	2区 SK131		(2.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	黒灰色/黒灰色		
第38図	20 須恵器 甕	1区 SK110		(1.8)	回転ナデ、タタキ	同心円当具痕	灰白色/灰白色		
	21 須恵器 壺	1区 SK110	底径 (12.0)	(6.1)	回転ナデ	実物要確認	灰色/灰色		
	22 東播系須恵器 銚鉢	1区 SK110		(3.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰色・暗灰色/灰色		
第45図	23 弥生土器 壺	1区 遺構検出時		(1.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色	鋤先口縁	
	24 弥生土器 壺	1区 遺構検出時		(3.7)	ヨコナデ、凸帯1条	ナデ	灰白色/浅黄色		
	25 弥生土器 壺	1区 遺構検出時		(5.3)	ヨコナデ、凸帯2条	ナデ	浅黄色/浅黄色		
	26 弥生土器 鉢	1区 表土	頸部径 (11.4)	(10.0)	ナデ	ナデ	にぶい橙色/にぶい橙色		
	27 弥生土器 壺	1区 遺構検出時	胴部径 (20.8)	(12.0)	ナデ、頸部刻目凸帯	ナデ	黄褐色/灰白色		
	28 弥生土器 壺	1区 遺構検出時		(2.3)	ナデ、頸部刻目凸帯	ナデ	黄褐色/黄褐色		
	29 弥生土器 鉢?	1区 遺構検出時		(2.6)	不明、接合痕あり	不明	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色		
	30 弥生土器 壺	1区 遺構検出時	底径 (7.5)	(5.6)	ナデ	ナデ	明黄褐色/にぶい黄褐色		
	31 弥生土器 壺	1区 遺構検出時	底径 (6.6)	(3.1)	ナデ	不明	にぶい橙色/にぶい黄褐色		
	32 弥生土器 甕	1区 遺構検出時	底径 (6.5)	(4.1)	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色		
	33 弥生土器 壺	1区 遺構検出時	底径 (5.2)	(4.1)	ハケメ	ナデ	にぶい黄褐色/浅黄色		
	34 弥生土器 高坏	1区 遺構検出時	脚部径 (6.4)	(8.5)	ナデ	ナデ、絞り痕	にぶい黄褐色/にぶい黄褐色		
	35 須恵器 坏蓋	1区 遺構検出時		(1.1)	回転ナデ	回転ナデ	灰白色/灰白色	摘みあり	
	36 須恵器 坏蓋	1区 遺構検出時		(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色/黄灰色		
	37 瓦器 椀	1区 遺構検出時		(3.3)	ヘラミガキ	ナデ	暗灰色・灰白色/暗灰色・灰白色		
	38 土師器 鍋	1区 表土		(4.1)	ヨコナデ・ナデ	ヨコハケ	にぶい黄褐色/淡黄色		
	39 土師器 鉢	2区 遺構検出時		(2.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	暗黄褐色/暗黄褐色		
	40 瓦質土器 鉢	1区 遺構検出時	底径 (11.0)	(2.3)	ハケメ、摩滅	ヨコハケ	灰色/灰色		
	41 瓦質土器 火鉢	1区 遺構検出時		(3.7)	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色・黄灰色/灰白色	凸帯下に雷文スタンプ	
	42 備前焼 摺鉢	1区 表土		(5.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	赤灰色/赤灰色		
	43 備前焼 甕	2区 表土	底径 (17.0)	(5.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	暗紫褐色/暗紫褐色		
	44 施釉陶器 碗	2区 表土	底径 5.4	(3.6)	施釉、高台露胎	施釉	暗黄色/暗黄色	京焼風陶器	
	45 陶胎染付 碗	1区 表土	底径 (4.4)	(2.9)	施釉	施釉	暗オリーブ灰色/暗オリーブ灰色	肥前系	
	46 染付磁器 碗	2区 表土	口径 (8.0) 底径 (3.2)	5.3	施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前系、破損部に補修痕跡	
	47 染付磁器 色絵碗	2区 表土	口径 9.0 底径 3.0	4.0	施釉	施釉	灰白色/灰白色	肥前系	
	48 染付磁器 皿	2区 表土	口径 9.5 底径 4.2	2.5	施釉	施釉、見込蛇の目釉剥ぎ	灰白色/灰白色	肥前系	
	第47図	57 ガラス瓶 ソース瓶	1区 表土	口径 2.6 底径 5.9	22.5			淡緑色/淡緑色	側面に「SAUCE / STARBRAND/TRADE ☆MARK / SAIHARA Co & LTD」、底面に「NB (?) 6」の陽刻

第4表 恒道原田遺跡遺物観察表（土製品）

挿図番号	器種	出土地点		法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考
				長さ	幅	厚さ			
第47図	55 土人形	2区	表土	2.3	0.4	0.5	5.6	土	胎土に滑石粉含む
	56 磁器 戸車	2区	表土	4.5	4.7	1.0	32.1	磁器	

第5表 恒道原田遺跡遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	器種	出土地点		法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
				長さ	幅	厚さ			
第23図	12 打製石鏃	1区	SK004	1.5	1.4	0.3	0.5	チャート	
第46図	49 三稜尖頭器	1区	遺構検出時	7.0	2.9	2.2	39.3	腰岳産黒曜石	
	50 石核	1区	遺構検出時	4.7	2.0	1.5	14.5	流紋岩	
	51 石核	1区	遺構検出時	3.3	3.6	2.5	35.0	チャートor鉄石英	
	52 剥片	1区	表土	3.7	3.4	0.6	13.8	チャートor鉄石英	腹面節理
	53 石皿	1区	表土	10.7	9.7	4.3	484.3	安山岩	
	54 砥石	1区	排土	5.5	5.0	4.9	126.1	砂岩	

第6表 恒道原田遺跡遺物観察表（金属製品）

挿図番号	器種	出土地点		法量 (cm)			重量 (g)	素材	備考
				長さ	幅	厚さ			
第47図	58 錢貨 一銭銅貨	2区	表土	2.8	2.8	0.2	6.6	銅	
図版8	59 鉄滓	1区	遺構検出時	2.7	2.4	1.5	15.8	鉄	

第4章 総括

第1節 恒道原田遺跡の年代的位置づけ

前章でみてきたように、恒道原田遺跡では弥生時代～近代の遺構、旧石器時代～近現代の遺物が出土しており、これらの複合遺跡であることが分かった。本節では主に遺物から、恒道原田遺跡の年代についてまとめたい。

第48図は出土遺物を基にした、恒道原田遺跡の時期区分である。I期は旧石器時代～縄文時代開始期頃が該当する。この時期の遺構はないが、後期旧石器時代に属する三稜尖頭器(49)や流紋岩石核(50)、縄文時代の打製石鏃(12)が出土している。三稜尖頭器は腰岳産黒曜石製で、他に腰岳産黒曜石はみられないことから製品として持ち込まれたものが、折損により廃棄されたのであろう。打製石鏃は長さ1.5cm、幅1.4cmと小型で、基部は浅く抉る。チャート製で、サイズや形状から縄文時代開始期に属する可能性が考えられる。他にチャート又は鉄石英の石核・剥片(第46図51・52)もI期に属する可能性が高い。出土石器が狩猟具で占められること、縄文土器の出土がないことから、I期を通してキャンプサイト的な土地利用がなされていたとみられる。

II期は弥生時代～古墳時代前期である。弥生時代では鋤先口縁壺(23)や肩部に数条の凸帯を巡らせる壺(24・25)が中期(IIA期)のものであるが、この時期の遺構はない。後期(IIB期)は口縁部が三角形に肥厚する壺(7)、頸部に刻目凸帯を施す壺(28)・丸底化した鉢(26)がある。また、肩部にタタキを施す甕(第19図9)もある。この時期の遺構としてはSK007、SK015、SK036、SP013等がある。

III期は古墳時代後期～古代である。この時期の資料には須恵器坏蓋(35・36)、甕(15)、土師器甑(13)がある。須恵器坏蓋は細片しかないが、頂部に扁平な宝珠摘みを持ち、口縁端部は嘴状に短く折れるものである。甕はほとんどが胴部破片で時期決定が難しい。ただし、坏類には確実に古墳時代後期に属するものはないので、坏蓋の年代を基にすると8世紀前半代に属する可能性が高い。ただし年代不詳の須恵器甕を考慮し、6世紀～8世紀前半と、少し幅を持たせて捉えておく。遺構としてはSB1、SP016、SK070、SK087が該当する。

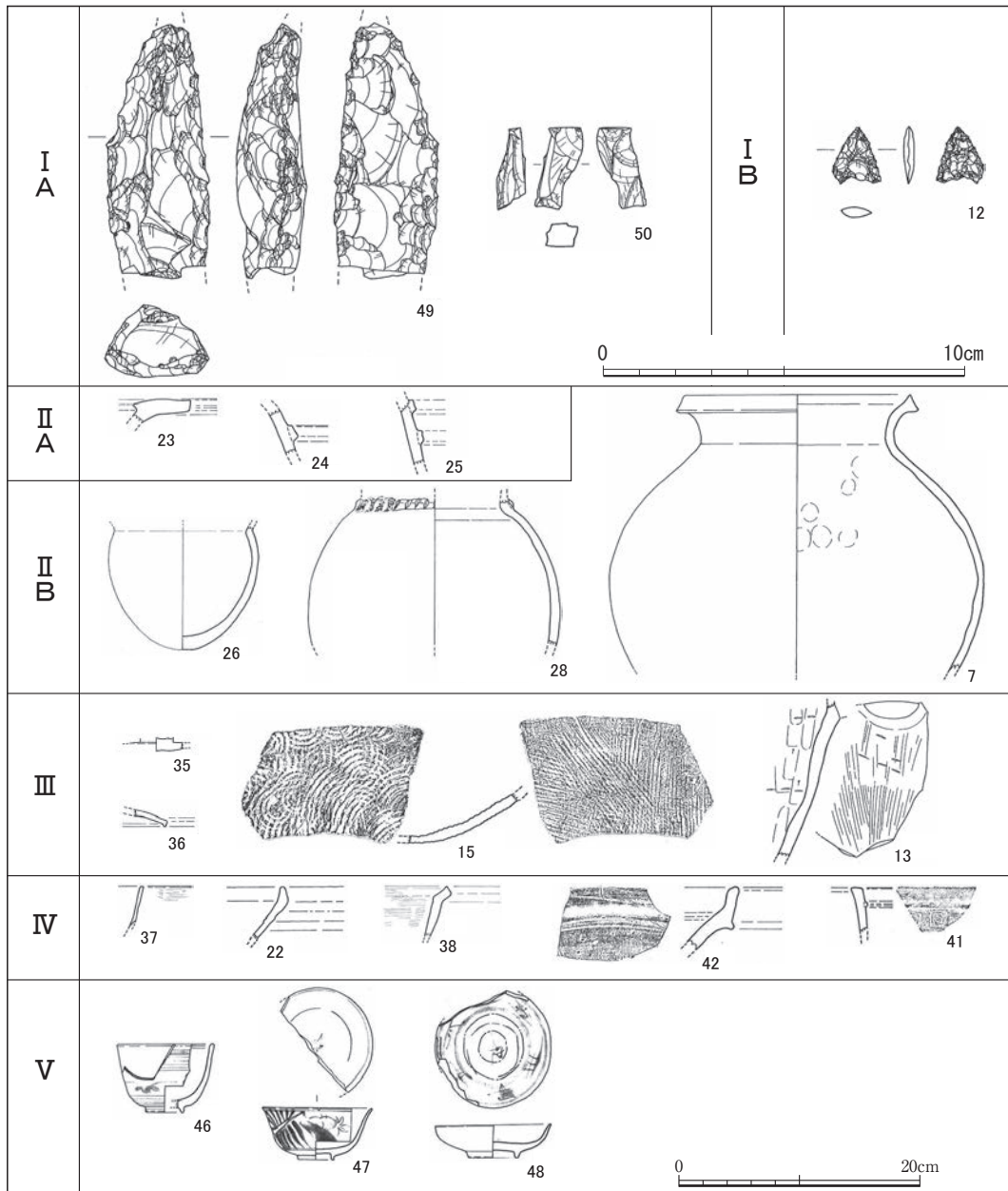
IV期は中世であるが、全体として資料に乏しい。中世前半期は瓦器椀(37)があるが、細片である。東播系須恵器(22)は14世紀代に位置付けられる。中世後半(15～16世紀)のものは、備前焼摺鉢(42)、瓦質土器火鉢(41)等があるが、それ以外は年代決定が難しい。備前焼摺鉢は形状から15世紀後半～16世紀前半のものである。遺構としては瓦器椀が出土したSK011、瓦質土器が出土したSK131がある。

V期は近世以降で、遺物としては18～19世紀を中心とした近世陶磁器類(46～48)がある。図示したものは19世紀代に属する。恒道原田遺跡一帯が水田化するのには近世以降で、溝SD008の開削は近世までさかのぼる可能性がある。

第2節 恒道原田遺跡周辺の遺跡動態

恒道原田遺跡で確認された遺構は、弥生時代の土坑、ピット、古墳時代後期～古代の掘立柱建物1棟、土坑、ピット、中世の土坑、近世以降の溝で、断続的に集落が形成されていた可能性が高いが、それ以上のことは明らかにできない。そこで、周辺の遺跡を含めて巨視的に眺めてみたい。

後期旧石器時代から縄文時代の遺跡としては大原遺跡がある。ここではナイフ形石器や剥片尖頭器、細石刃等の石器が出土した口野尾遺跡・日久保第1遺跡・日久保第2遺跡と同様の石器が採集されているという¹⁾が、正式報告書が刊行されておらず詳細は不明である。大原遺跡出土資料の概要では、大分県立歴史博物館所蔵入江コレクション中の黒色黒曜石・石英・頁岩製石器、姫島産黒曜石の石核と剥片等が掲載されている²⁾。姫島産黒曜石の利用は縄文時代早期以降に一般化する³⁾ので、これらは縄文時代早期以降で、後述の弥生時代の竪穴建物から出土したものである可能性が考えられる。また、恒道原田遺跡の南西に位置する龍頭遺跡では、縄文時代後期前半の貯蔵穴群が検出されている⁴⁾。弥生時代～古墳時代前期の遺跡も大原遺跡と龍頭遺跡で確認されている。大原遺跡では中期の円形竪穴建物4基をはじめ、後期～古墳時代前期の石棺5基等

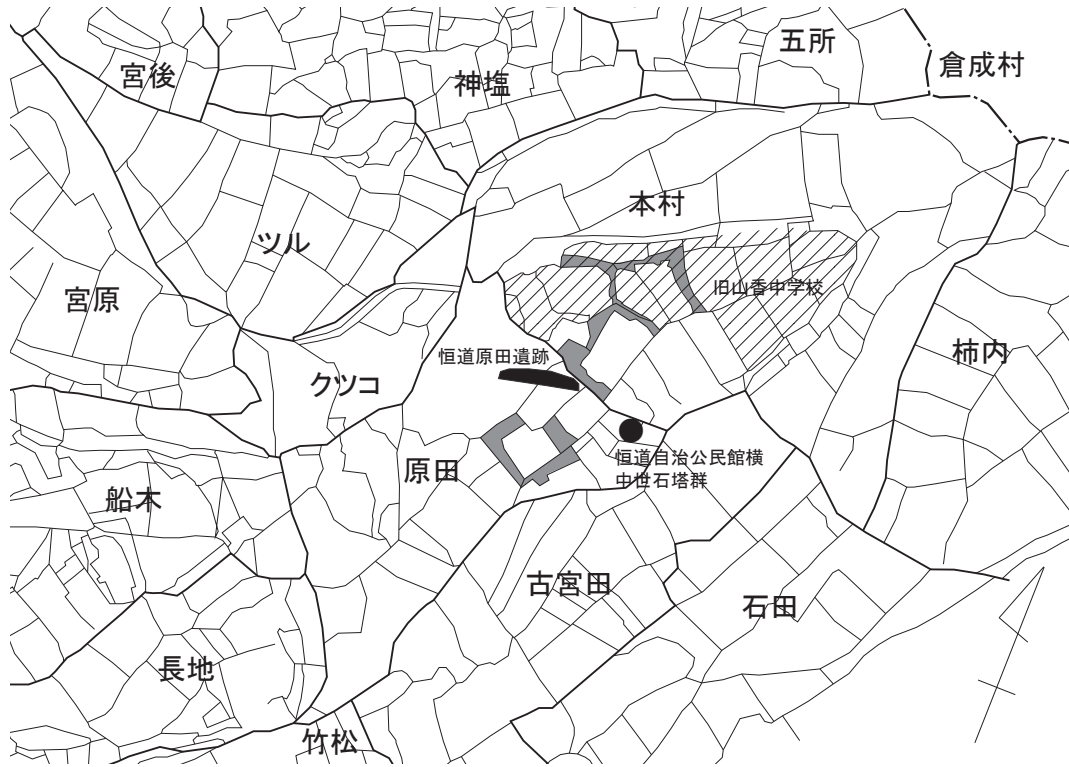


第48図 恒道原田遺跡出土遺物による時期区分

が確認されているという⁵⁾。龍頭遺跡では明確な遺構はないものの、弥生時代中期～後期の良好な土器が数個体出土している⁶⁾。

古墳時代の遺跡としては大原遺跡・大原古墳が挙げられる。特筆すべきは大原古墳で、ここでは直径約28mと約18mの円形の周溝2基が確認されており、それぞれが古墳の周溝とみられている。出土した須恵器から、5世紀後半の埴輪を伴う円墳（28m）と、6世紀中頃の古墳群があったとみられている⁷⁾。

古代の遺構については確認されていないが、龍頭遺跡では平瓦の他に「土主」と判読できる墨書須恵器や、豊後大分型甕と呼ばれる土師器甕等、特徴的な遺物が出土している⁸⁾。こうしたことから官衛的性格あるいは古代寺院が龍頭遺跡近辺に存在した可能性が考えられる。



第49図 恒道原田遺跡周辺の野原村旧字図（約1/5000）



恒道自治公民館横の中世石塔群



都甲伊豆守を祀る祠の銘文

第50図 恒道自治公民館横石塔群と石祠

中世の遺跡としては、大原遺跡では13世紀代の丸瓦・平瓦の出土が確認されており、当地に中世寺院あるいは支配拠点形成されていた可能性が指摘⁹⁾されている。その他遺跡としては、甲尾山城跡や大原遺跡の北方丘陵上に竜ヶ鼻城跡といった中世城館が築かれる。また、杵築市山香庁舎のある丘陵東部には中世石造物の所在が目立つ。中でも浄栄寺跡とされる場所には、応安7年（1374）の銘を持つ国東塔をはじめとした石塔が見られる。望月友善によれば、同地にはもう1基、永正11年（1514）銘のある石塔婆があり、それには「郷司野原対馬守紀昌久自長善秀大禅定門」の銘が刻まれている¹⁰⁾。

以上、旧石器時代から中世にかけての恒道原田遺跡周辺の遺跡動態に触れてきた。その結果、恒道原田遺跡・龍頭遺跡・大原遺跡では、複数時期の遺跡が断続的に営まれていることが分かる。こうしたことから、これら地域に古代山香の中心的な遺跡が存在した可能性が考えられる。古代山香郷を支配した山香郷司については第2章で触れたが、中世以降、大友氏の支配のもとで山香郷の支配は野原氏と志手氏が担っていたことが知られている。この両氏は山香郷両政所あるいは西政所・東政所として文書にも登場する。このうち志手氏の拠点は貫井にある志手氏館跡に比定されるが、野原氏の拠点については明らかになっていない。先に見た遺跡動態を勘案すると、大原遺跡は野原から外れるので、残りの恒道原田遺跡か龍頭遺跡の近辺がその候補地として挙げられる。その中でも龍頭遺跡近辺には、先に触れた浄栄寺跡に郷司野原昌久の銘をもつ石塔があるなど、野原氏との関係が深いエリアであるといえる。資料に限られる現状では、この近辺に野原氏の拠点を想定するのが妥当であろう。西の志手氏館に対して龍頭遺跡は相対的に東に位置するので、西政所＝志手氏、東政所＝野原氏とみることもできるのではないだろうか。

また、戦国時代の山香郷給人帳には、恒道名の支配者として都甲伊豆守の名がみえ、旧山香中学校の場所には都甲氏の館跡があったという¹¹⁾。しかし、現地は既に旧山香中学校建設時に造成されており、建設時に発掘調査が行われていないため確認ができない。そこで、明治21年に調製された旧字図を合成したものを第49図に示す。後年の分筆が随所にあり分筆前の本来の地番で作成しているが、字図そのものの破損や、汚れ等により字が判読できないものもあるため、一部正確さを欠く部分はあるものの、これを見ると字「本村」の旧山香中学校辺りに、形状が歪ではあるものの土塁あるいは堀の痕跡の可能性のある地割に囲まれる場所が認められる。また、字「原田」の中にも、1辺約50mの方形に区画された地割が認められる。このすぐ近くには恒道自治公民館があり、その横に五輪塔や宝塔からなる中世石造物が集められている。その中央に、1基の祠が祀られており、背面に次の銘文が見られる（第50図）。

（銘文）天文三年四月六日大村而戦死
都甲伊豆守霊神
中（カ？）祖伊豆守末孫拾四名而建之
明治廿九年正月四日祭之

この祠は、天文3年（1534）に大村で戦死した都甲伊豆守を、明治29年（1896）にその子孫が供養のため祀ったものであるが、内容から大内氏と大友氏の間で行われた勢場ヶ原の合戦に関するものであることが分かる。こうした祠は都甲氏と所縁のある場所に建てられるであろうから、この至近地に都甲氏の館があったとみるべきであろう。『大分県の地名』の記載を正とすれば前者ということになるだろうが、前者は現地にその痕跡は認められず、また地籍図上の痕跡としては字「原田」にある後者の方が明瞭である。この場所の地形は恒道原田遺跡やその周辺よりも一段高くなっている。また、字「原田」と字「古宮田」の境は段丘崖となっており、防御性の面でもその可能性は高いと考えられる。現状ではこれ以上迫ることができないが、いずれにせよ恒道原田遺跡の発見によって、この地域の埋蔵文化財の状況が初めて明らかになった意義は大きく、今後周囲での発掘調査が行われれば、こうした点の解明に繋がるものと期待される。

註

- 1) 宮内克己2010「先史～古代の山香郷」『豊後国山香郷 1 国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査概報』、大分県立歴史博物館
- 2) 綿貫俊一2013「I 考古資料」『豊後国山香郷の調査 資料編 1』大分県立歴史博物館報告書第14集、大分県立歴史博物館
- 3) 宮内克己2003「大分県旧石器～縄文時代遺跡出土の姫島産黒曜石」『大分県立歴史博物館研究紀要』 4、大分県立歴史博物館
- 4) 吉田 寛1999『龍頭遺跡』大分県文化財調査報告書第102輯、大分県教育委員会
- 5) 宮内克己前掲注1)
- 6) 吉田 寛前掲注4)
- 7) 綿貫俊一前掲注2)
- 8) 吉田 寛前掲注4)
- 9) 宮内克己前掲注1)
- 10) 望月友善1975『大分の石造美術』木耳社。
なお、大分県教育委員会が実施した中世石造遺物分布調査ではこの浄栄寺跡を「何松家墓地石塔群」として報告しているが、永正11年銘の石塔婆については触れられていない。
原田昭一編2013『大分の中世石造遺物』第1集 分布図・地名表編(上)、大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第70集、大分県教育庁埋蔵文化財センター
- 11) 平凡社1995『大分県の地名』日本歴史地名大系第45巻、野原村の項参照。
なお、野原村の属する速見郡の執筆は佐藤暁・楢本讓司が担当している。

写 真 图 版



恒道原田遺跡空中写真（南東から甲ノ尾山、山香市街地を望む）



恒道原田遺跡空中写真（北東から龍頭遺跡方面を望む）



恒道原田遺跡 1区完掘状況（東から）



恒道原田遺跡 2区完掘状況（東から）



1 区南壁土层 (部分)



2 区南壁土层 (部分)



SP005



SP013



SK015 半截



SK036



SK015



SK036 完掘



SB1



SB1 柱穴 SP058 土层断面



SB1 柱穴 SP061 土层断面



SK004



SP016



SK070



SK087



SK011



SK131



SD008



SD008 土层



SK110



SX122 (礎石)



SA1



SA1 柱穴 SP118



SA1 柱穴 SP119



SA1 柱穴 SP120



SK001



SK002



SK010



SP014



第13图5



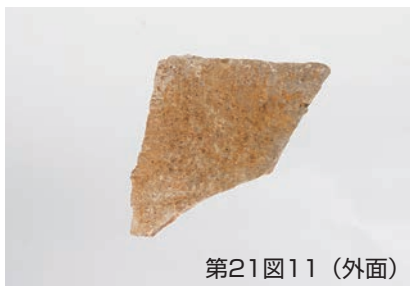
第15图6



第17图7



第19图9



第21图11 (外面)



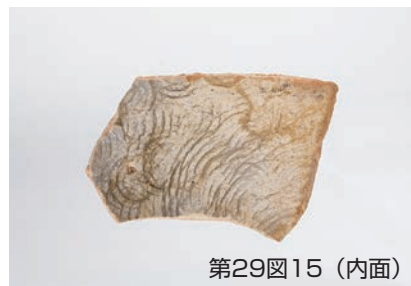
第21图11 (内面)



第25图13



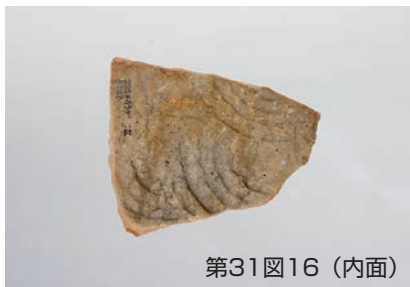
第29图15 (外面)



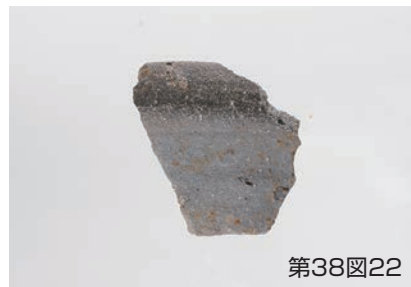
第29图15 (内面)



第31图16 (外面)



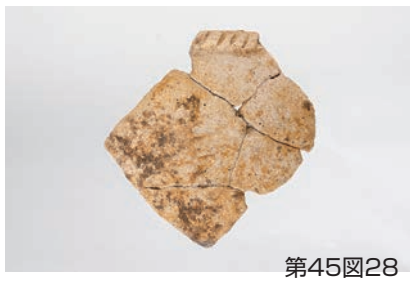
第31图16 (内面)



第38图22



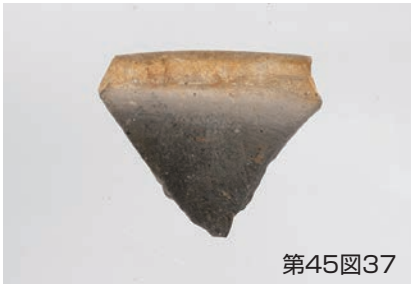
第45图26



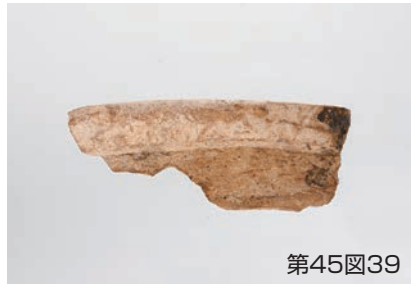
第45图28



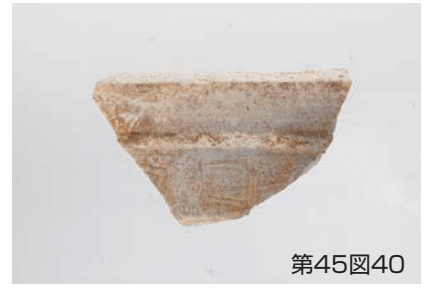
第45图24



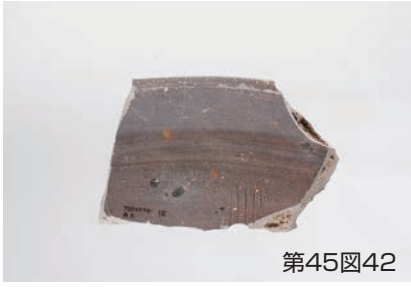
第45图37



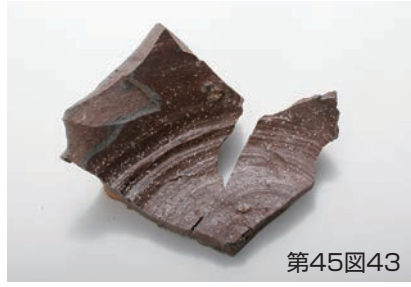
第45图39



第45图40



第45图42



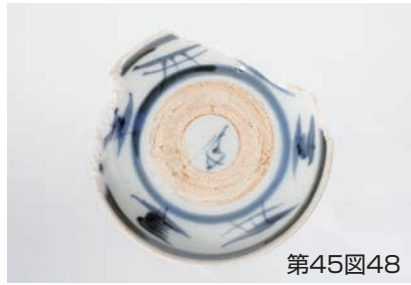
第45图43



第45图44



第45图47



第45图48



第47图56



第46图49



第46图50



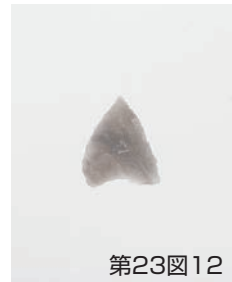
第47图57



第46图51



第46图52



第23图12



(图なし) 59

報 告 書 抄 録

ふりがな	つねみちはるだいせき							
書名	恒道原田遺跡							
副書名	県道山香院内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	横澤 慈							
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒870-0152 大分市牧緑町1番61号 TEL 097-552-0077							
発行年月日	西暦 2021年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃	〃			
つねみちはるだいせき 恒道原田遺跡	きつきしやまがまちのはる 杵築市山香町野原	44210	210297	33° 26′ 53″	131° 30′ 37″	2020.1.20 ～ 2020.2.25	523m ²	県道山香 院内線道 路改良事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
恒道原田遺跡	集落	旧石器 弥生～中世	掘立柱建物、 土坑、柱穴、溝	三稜尖頭器、弥生土器、土師器、 須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、 磁器				
要約	<p>恒道原田遺跡の発掘調査は県道山香院内線道路改良事業に伴い実施した。</p> <p>確認された主たる遺構は、弥生時代の土坑・ピット、古墳時代後期から古代の掘立柱建物、土坑、ピット、中世の土坑である。遺物は旧石器時代の三稜尖頭器をはじめ、弥生時代中期～古墳時代初頭頃の土器、古墳時代後期～古代の土師器、須恵器、中世の土器・陶磁器、近世～近現代の陶磁器等が出土している。旧石器時代～縄文時代初頭頃は狩猟具を主体としておりキャンプサイトとしての利用である。集落形成は弥生時代からで、弥生時代後期、古墳時代後期から古代、中世と断続的に営まれた遺跡である。</p>							

恒道原田遺跡

—県道山香院内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書 第18集

令和3(2021)年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター
〒870-0152
大分市牧緑町1番61号
TEL 097-552-0077

印刷 株式会社プリメディア
〒874-0923 別府市新港町1-13
TEL 0977-23-3288